

平成24年度 道徳教育指導資料

郷土資料にかかわる実践事例集
【中学校編】

平成 2 5 年 3 月

青森県教育委員会

はじめに

昨今、全国において、中学生が自ら命を絶ち、その背景としていじめの事実が認められるなど、痛ましい事案が発生しております。このため、各学校においてはこれまで以上に、あらゆる教育活動を通して、しっかりと家族、友人、地域の絆を深めながら、規範意識、思いやりの心、命を大切にする態度等の豊かな人間性や社会性をはぐくむ教育の充実が重要となっております。

県教育委員会としましては、学校教育指導の方針と重点に、「道德教育の充実」を掲げ、道德性の育成に各学校で全力を傾注して取り組んでいただくようお願いしているところであります。

このような中、道德教育の一層の充実に資するため、郷土に視点を当てて作成したのが、この実践事例集です。

その趣旨は、学習指導要領を踏まえ、郷土の先人の伝記や逸話、自然、伝統と文化、スポーツなどを題材に取り上げ、心に響く授業を行うことによつて、二十一世紀に生きる子どもたちの道徳性や郷土に対する誇りと愛着を培おうとするものであり、各学校の実践に活かせる極めて有意義な役割を担うものと考えます。

本実践事例集は前半で、郷土にかかわりのある、現在活躍されている人々や先人を題材とした六編及び平成八年度の同事例集に掲載された読み物資料を改訂した六編を掲載しております。また、後半で、各作成委員の実践を基にした活用例を掲載しております。特に、読み物資料に多くのページを割き、写真やイラストを掲載するなど、魅力的な読み物にすることを心がけました。

各学校においては、活用例を参考に、それぞれの学校・家庭・地域の実態に応じて本書を積極的に活用されることを希望します。

最後に、本書の作成に当たって、一年間にわたり御尽力いただきました作成委員並びに関係各位に、心からお礼申し上げます。

平成二十五年三月

青森県教育庁

学校教育課長 成田昌造

目次

第一章 読み物資料

(1)	高い塔を建てなければ、新たな水平線は見えてこない	川口淳一郎	2
(2)	人々の心の再生を目指して	佐藤初女	8
(3)	震災のあと	1 2 年 2 (6)	12
(4)	奥津軽にかける夢	白川公視	18
(5)	下北から甲子園へ	富岡哲	22
(6)	洋式牧場の先駆者	廣澤安任	26
(7)	離島民とともに	笹森儀助	30
(8)	岩木川治水を手がけて	長尾角左右衛門	34
(9)	袈裟掛けの松	法身禅師	38
(10)	孤児院のオドサ	佐々木五三郎	42
(11)	日本で最初に予防接種をした男	中川五郎治	46
(12)	猪飢渴を見つめた人	安藤昌益	50

第二章 読み物資料の活用例

	(1)	高い塔を建てなければ、新たな水平線は見えてこない	56
	(2)	人々の心の再生を目指して	57
	(3)	震災のあと	58
	(4)	奥津軽にかける夢	59
	(5)	下北から甲子園へ	60
	(6)	洋式牧場の先駆者	61
	(7)	離島民とともに	62
	(8)	岩木川治水を手がけて	63
	(9)	袈裟掛けの松	64
	(10)	孤児院のオドサ	65
	(11)	日本で最初に予防接種をした男	66
	(12)	猪飢渴を見つめた人	67
付録		「道徳の内容」の学年段階・学校段階の一覧表	68

「第一章 読み物資料」

高い塔を建てなければ、新たな水平線は見えてこない

〜川口淳一郎〜

かわぐちじゅんいちろう

小惑星探査機「はやぶさ」プロジェクトチームを指揮した一人の男性がいる。弘前市出身の川口淳一郎教授である。平成二十二年、日本時間の二〇一〇年六月十三日「はやぶさ」は、約六十億キロメートル（地球を約十五万周する距離）を飛び続け、月以外の星からのサンプルリターン（地球から三億キロメートル離れている小惑星「イトカワ」から約千五百個の砂の粒を持ち帰る）という人類史上初めての快挙を達成した。平成十五年（二〇〇三年）五月九日の打ち上げ以来、七年一か月と七日間を費やし、世界初の偉業を成し遂げた川口教授。しかし、その陰には数多くの苦難があった。

幼い頃、川口少年は、よく汽車や工事現場を見にいらっていた。弘前市立時敏じびん小学校六年生とき、一番見たかったのは月だった。そこで望遠鏡を手づくりし、ふじつぼ状の穴ぼこが見えたことに喜びを感じ「もつとよい物をつくろう」と思った。弘前市立第一中学校時代は、固体ロケットの図面を描いたり、本を頼りにハイパワーのアンプを作ったりした。そして、青森県立弘前高等学校では、業者でなければ直せないような放送機器の故障を直し、京都大学時代は、京都から自転車で弘前市の実家へ帰ってきた。冒険心、探究心に富み、型破り、ものづくりや技術、宇宙に興味の深い少年であった。

こうして、東京大学宇宙航空研究所に入り宇宙開発の現場に立ったが、このとき、世界との歴然たる差を目の当たりにした。最先端に行くアメリカのNASAは、予算、人員、経験、どれをとっても日本とは比べものにならないほど規模が大きかった。それでも、一九八〇年代後半、日本はアメリカと共同開発を進めるほどに成長していた。五年以上にわたる共同研究のなかで、「弾道の彗星サンプルリターン」と「片道の小惑星ランデブー」が実現も近いと思われていた。ところが、NASAは直前になって、どちらの計画も独自で行うと言い出したのだ。

「『片道の小惑星ランデブー』は日本オリジナルの案。日本は予算が少ない、計画推進も遅いとはいえ……。」

川口教授の心には、晴れない思いがつのった。悔しかった。このままでいいのだろうか。そして、

「日本は往復で小惑星サンプルリターンをやる。」

と、平成四年（一九九二年）十月、日米共同研究会の席上で、川口教授は突然宣言した。そろって冷やかな目を向けるNASAの宇宙開発者たち。

「一世一代のハツタリでした。『こんちくしょう』と思ったからですよ。」

勢いで言った言葉だった。ただし、自信や根拠がなかったわけではない。この夢に川口教授は心が躍っていた。何としても実現させたい。しかし、それは同時に、「限られた時間、限られた予算での前例のないプロジェクト」の実行に「失敗は許されない」というプレッシャーにおそわれる日々がやってくることを意味していた。

やがて、困難や妥協の連続ながらも「はやぶさ」は無事打ち上げられ、惑星「イトカワ」へのタッチダウンも成功させたプロジェクトチーム。歓声と同時にどよめきが起こり、握手する人、肩を抱き合う人、目にうつつすら涙を浮かべている人……。世界中のメディアがこの快挙を報じ、祝福と賞賛のメッセージが川口教授らのプロジェクトチームに届いた。

ところが、この時すでに「はやぶさ」は、エンジンから燃料漏れを起こしていたのである。「はやぶさ」は姿勢を維持できなくなり、地球との交信も途切れ途切れになったため、地球からの指令も届かない。ソーラーパネルは太陽の方向からずれ、電力も供給できなくなる。電力を失った「はやぶさ」は宇宙空間でただくるくると周りながら浮遊するしかない。さらに、「はやぶさ」から送られてきたわずかな信号から、惑星「イトカワ」のサンプル（表面の土）が回収できていない可能性まで示された。そして、追い打ちをかけるように、タッチダウンから十二日後の十二月八日、通信は一切途絶えてしまった。三億キロメートル彼方かなたで「はやぶさ」は迷子になってしまったのである。

行方不明になった惑星探査機が再び見つかった例はこれまでない。閑散とする管制室。プロジェクトがこのまま終わっても不思議ではなかった。「はやぶさ」が見つかり実際に復旧する確率は、〇・一パーセントかも知れなかった。ただ、「不可能ではないのだ。だから、ひたすら呼び続けよう。」川口教授は再びこう決意した。そこで教授は少しでも士気を高めるため、意図的に会議の回数を増やした。これからどうすべきかを、チームみんなで検討したのである。それをもとに、一人一人に可能性のある策を割り振った。些細ささいなことだがポットのお湯も自ら替えた。

JAXA^{ジャクサ}の職員や外部から来たお客さんがお茶を飲もうとしたとき、水が出てくれば「もうプロジェクトの終わりも近いんだな。」という印象を持ちかねない。どん底の状態にはいたが、もうそれ以上悪くなることはない。最悪ということは、次に変化があるとしたら間違いなくプラスの変化。必ず春が待っている。そう信じて平成十八年（二〇〇六年）の年明けを迎えた。

そして、その年の一月二十三日、川口教授はフロリダで一本のメールを受け取った。

『『はやぶさ』からのものと思われる電波が受信されました。安定しています。』

しばらくは声が出なかった。

「本当に間違いないのか。」

三億キロメートル離れた「はやぶさ」との交信が復活することを願い、四十六日もの間、気が遠くなるような作業を続けた結果、ついに電波をとらえたこの時、「はやぶさ」は「行方不明から再び発見された世界最初の探査機」となった。

平成二十二年（二〇一〇年）六月十三日午後一〇時五十一分、オーストラリア上空で青い光の点が、地球の大気圏再突入を告げ、「はやぶさ」の過酷^{かこく}な旅は終わった。プロジェクトチームの「ゴールは地球」という「信念」、「情熱」、「大胆な発想力」によって、「はやぶさ」は見事に地球に帰ってきたのである。

「私には“じよっぱり”精神がある。」

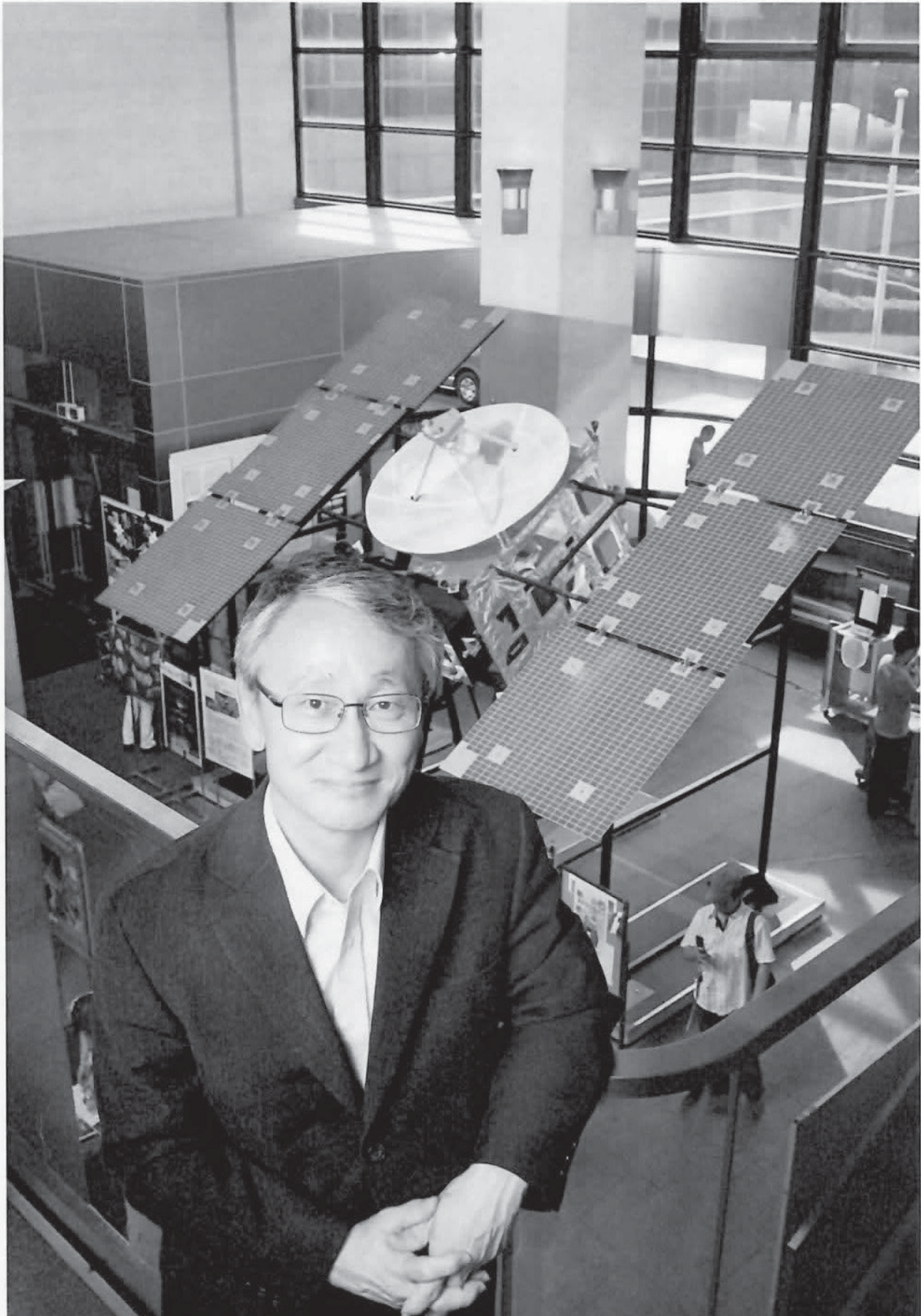
と川口教授はつぶやいた。創造性に富み、負けん気が強く、一度言ったことは絶対にやり遂げる意地の強さ、それが“じよっぱり”精神である。日本には無理だと世界中から言われたミッシェンを、数多くのトラブルに見舞われても、決して諦めず、技術と知恵とチームワークで乗り越えてきた「はやぶさ」。それを指揮した川口教授は言う。

「“じよっぱり”精神は、青森という土地で自分でも気付かぬうちに培われている。どれほど時代が進んでも、どんな環境に投げ出されても、この“じよっぱり”の精神には、困難を乗り越え、切り拓く力がある。型通りの考え方を離れ、独自のものの見方をしようという気風もある。青森県の若者たちには、創造性と勇氣、そして誇りをもって未来に羽ばたいてほしい。」

「高い塔を建てなければ、新たな水平線は見えてこない」と言う川口教授の歩みもまた、止まることなく、今なお続くのである。

※1 弾道の彗星サンプルリターン：ガスや塵の多い彗星の中を通り抜けてサンプルを回収する方法。

※2 片道の小惑星ランデブー：探査機を小惑星に近づけ、ぴったり同じ速度で飛行させて観測や撮影をする方法。



川口淳一郎教授

人々の心の再生を目指して ↳ 佐藤初女 ↳

春まだ浅い雑木林の中に、その人は静かに耳を澄まして立っていました。澄んだ空気の中に小鳥のさえずりや沢のせせらぎの音が聞こえます。やがてその人は小さな枯れ枝を持って、サクサクとさわやかな音を響かせ、まだ雪の下にある淡い緑色をしたふきのとうの周りの雪を、そっと優しく取りのぞいていました。

「よく来ましたね。どうぞ召しあがれ。……またいらつしやい。」

優しく話しかける弘前市の佐藤初女さんのところには、国内はもとより海外からも、心や体に悩みを抱え、救いを求める人々が集まって来ます。不治の病、人に言えない悩み、家族を亡くした苦しみ……。初女さんは黙って傍らに座って耳を傾け、最後まで話を聞きます。それから季節の新鮮な食材を使って心尽くしのおむすびや手料理をつくり、食事とともにするので。ただそれだけのことなのに、人々は初女さんの優しさに触れて、気付けば自分で心の荷物を降ろして帰っていくのです。

そんな初女さんを慕う人が一人また一人と増え、やがてたくさんの人々の善意の奉仕や寄付に支えられ、岩木山の麓に『森のイスキア』と呼ばれる憩いと安らぎの家ができました。

かつて初女さんのもとに、仕事や人間関係で悩み、死を決意した青年が訪れたことがあります。

した。その青年は、

「生きているのはもういやだ。役に立たない自分など死んだ方がいいのだ。」

と、肩を震わせてひたすら大きな声で泣きました。今はもう誰の言葉も心に届かない、そう感じた初女^{はつめ}さんはそっと黙って聞いているしかありませんでした。

朝になり、泣きはらした顔の青年が帰るとき、長い時間何も食べていないことに気付いて、慌^{あわ}てておむすびをつくって渡すだけで精一杯でした。

心配していた初女さんのもとに、青年のご家族から連絡が入ったのは、それから間もなくのことでした。

「なぜだかとても落ち着いて帰ってきました。一体、どんなことをしてくださったのでしょうか。」

しかし、初女さんにもその理由は分かりませんでした。

後に、青年が自分の気持ちを話せるようになったときに打ち明けてくれた答えはこうでした。

「もう死ぬことしか考えていなかった帰り道、ふと気付くと手にはもらったおむすびがあった。そのおむすびがタオルに丁寧^{ていねい}に包まれていたことに気が付いたから……。」

初女さんは、おむすびをラップで包むと水分が出てきて味が落ちたり、ご飯ものも湿^{しめ}っぽくなくなってしまったため、いつもうまく湿度を調節してくれるタオルに包んでいました。

おむすびはもともと心に苦しみをもち、黙り込んでしまう人々に、何か一口でも食べてほしいと考えたことが始まりです。祈るように米をとぎ、米の顔を見て水加減を変え、炊^たいたご飯

をふんわりすくいとって型をとり、梅干しを置く。にぎるときはお米の一粒一粒が呼吸できるように気を配り、そつとにぎる。のりで丸く全体を包み込む。きれいな形をしていても、ほろほろと口の中でほぐれる、そんなおむすびをおいしいと思った瞬間に、人の心の扉が少しずつ開いていくのでした。初女さんのおむすびをいただいた人の一人は、
「出されたおむすびを食べたら、なぜだか不思議と元気がわいてきたのです。初女先生のおむすびは、ここににぎるのですね。」
と胸に手を置きながら話してくれました。

初女さんは言います。

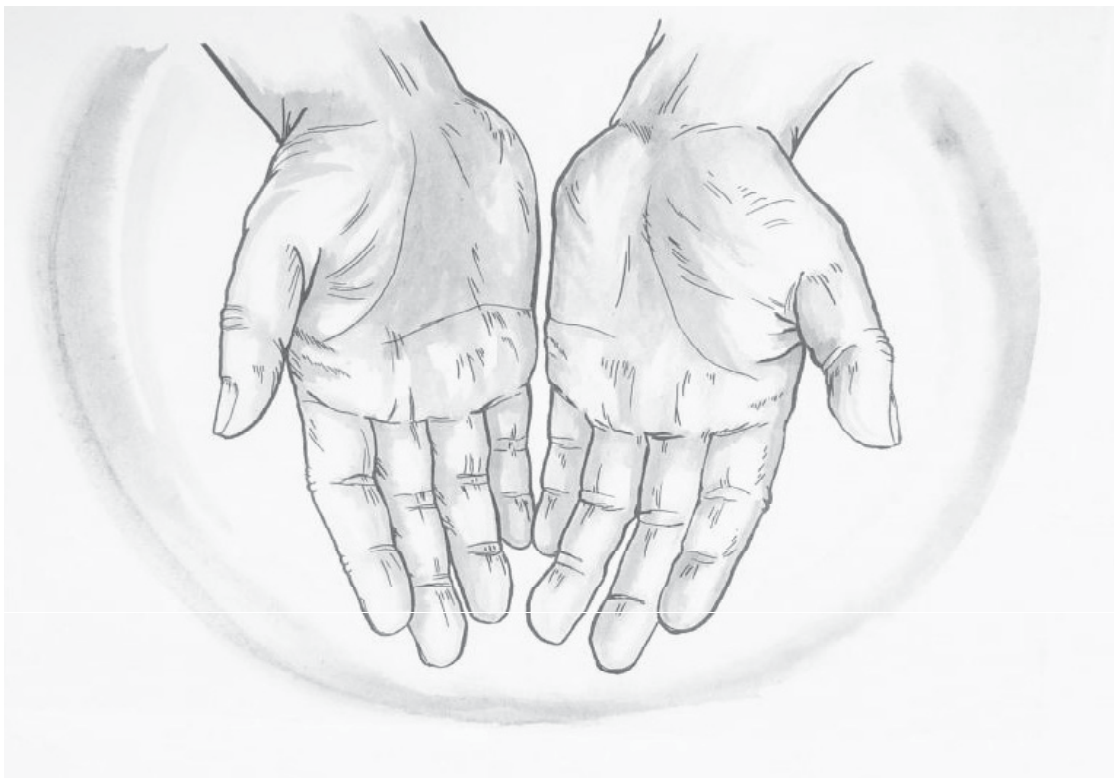
「支えるということとはともにいるということ。悩みを抱える人の多くは、本当はどうすればいいのか分かっていません。ですからこうしなさいと指図するのではなく、そばにいて共感し、一人でも多くの人が自分なりの解決方法を見付けるのをお手伝いをするのが、私の役目なのです。」

その言葉どおり、初女さんの枕元にはいつも電話があります。寝静まった真夜中にでも、苦しんでいる人からかかってくるからです。疲れて布団に入り、うとうとしかけた頃に戸が鳴ることもあります。身支度を整えて玄関に立ち、「誰だろう。」と不安に思いながら、鍵を開ける

こともあります。自分は何も食べられないほど体がつらいのに、その人のためにご飯の用意を始めることも。傷ついて、生きる力を失った人々のために、初女^{はつめ}さんはおいしい食事をつくるのです。

人々の悩みや迷いに耳を傾け、寄り添ってきたその活動は、ドキュメンタリー映画で紹介され、広く世に知られるようになりました。そして九十歳を超える現在でも『森のイスキア』を拠点^{きょてん}として、国内外での講演活動や講習会など多忙な日々を送っています。

岩木山をはるかに望む豊かな自然の中で、みんなが集^{つど}う安らぎの場をつくりたい。そう考え、食と命の尊さを伝え続けて五十余年、初女さんは今日も『森のイスキア』を訪れる人々の悩みや苦しみを分かち合い、多くの人々に生きる勇気を与えています。自ら心を込めた料理と、飾らない笑顔で。



震災のあと

中学校でソフトボール部に入っている私。ソフトボールが大好きな仲間たちと温かな家族に支えられ次の春季大会での優勝を目指し、練習に明け暮れる生活を送っていた。

ところが、私にとって一生忘れられない日、それはまもなく中学三年生になろうとしていた平成二十三年三月十一日のこと。一面ががれきと土砂に埋め尽くされ、一瞬で私の住む町は大きく変わってしまった。

地震直後、津波が家の一階天井まで押し寄せた。窓ガラスが破れ、壁だけがかろうじて残っている状態。家財道具は何一つ残らなかった。学校にいた私、買い物に行っていた母、仕事に行っていた父は無事だったが、私が五歳の時からずっと友だちだった犬のクロは、おぼれて死んでしまった。

大切にしていたヘッドホンステレオも、好きだった本も全部流された。思い出の写真も全て……。学校に持って行っていたものだけが、私の全財産となった。何もかもな



くしてしまった。そして、何より大好きなソフトボール部のユニフォームがない。胸にぽっかりと穴が空き、何かが流れ出すような感覚に襲われた。その日の夜は市内の親戚の家にお世話になった。

翌日の十時ごろ、父と母とともに家に戻り、片付けを始めた。

これからどうなるのだろう。私は転校しなければならないのだろうか……。考えることがあり過ぎて、逆に何も考えられない。私は庭にたまったがれきを運び続けた。

近所の人たちもそれぞれに片付けを始めていた。海の砂が家の中に厚くたまっている。海の臭いなのか、あふれた汚物の臭いなのか、たまった砂からは、嫌いやな臭いがした。砂をかき出し、がれきをただただ移動する作業が続く。本当にこれが片付くのか。明日からの生活は……。そんなことはだれも言わない。黙々と片付けていた。でも、正直なところ、私は何もしたくなかった。

「ゆき子、ちよつとおいで。」

家の中に入って、ゴミを運び出していた母が私を呼んだ。母が指さす壁に、小さなメモが貼り付けてあった。

ゆっこへ。学校で待ってるよ。いっしょにいっぱい話そう。

ミキ

「……。」

「ミキちゃん、来てくれたんだね。」

母はそう言うとメモをそつとはがして、私の上着のポケットに入れた。

がれきをかき分け、砂に足を取られながら、駆けつけてくれた友だち。私を待っている友だちが学校にいる。私はものすごくミキに会いたくなかった。

片付けを始めて一時間くらいしたころ、

「お手伝いさせてください。」

と同じクラスの畑中君と松田君が家にやってきた。驚いて返事もできずにいた私の横で母が、

「まあ、手伝いにきてくれたの。どうもありがとう。」

と言った。野球部が声を掛け合い、部員全員で津波の被害を受けた地区に来ているという。畑中君と松田君はあいさつもそこそこに、すぐスコップで砂を運び始めた。門を出て、家の周りの様子を見てみると、野球部だけでなく、たくさんの中学生ががれきの片付けを手伝っている。バスケットボール部の後藤君も陸上部の須藤君も。声を掛け合っ
て来ている人もあれば、とにかく自分ができることをしようと一人でやってきている人もいた。

夜はまた親戚の家に行かなければならないので、五時には片付けを切り上げた。畑中君と松田君は明日も来ると言って帰っていった。もう永遠に片付かないような気がしていた一階部分の砂は、床まで掘り下げることができ、がれきも家の中にはなくなっている

た。

帰りの車の中、一日中働いた私たちは疲れきっていた。しかし、月曜日は必ず学校に行こうと私は決めていた。

三日ぶりの学校。いつも何も思わずに通っていた正門。なんだか懐かしいような気がした。どんな顔をして友だちに会えばいいだろう。父の仕事の都合で、いつもよりも早く学校に着いた私は、まだ人気の少ない校舎に入った。当たり前だけれど、私の上履うわばきが下駄箱たばこにあったことにちよつと驚いた。なんだか全てなくしてしまったような気になつていたから。教室に入り、教科書を机に入れた。何となく、そわそわとして落ち着かなかつた。

「ゆっこ。」

私を呼ぶ声がした。カバンを背負ったままのミキが、廊下から私を呼んだ。私はミキに駆け寄つた。

「ミキ……。」

ミキに抱きしめられたら、涙があふれた。泣きたくなかつたけれど、止まらなかつた。ミキは大丈夫、大丈夫、と言いなながら私の背中を優しくたたいた。

廊下でしばらくミキとおしゃべりをした。他の地区はずっと停電が続いているけれど、家の被害やけが人は出ていないことや、製紙工場が大きな被害にあつてバスケットボール部が練習でよく使っている体育館はまだ海水が残っていることなどを話した。ミキの

お父さんも昨日は帰ってこなかったらしい。中学校の学区には製紙工場の社宅と陸上自衛隊の官舎がある。家は無事でも、父親の職場が被害にあって大変な友だちや、十一日のうちに被害の大きい地域へ父親が派遣された友だちのことも聞いた。余震がまだ続居中、父親が家にいないなんて、とても心細いだろう。改めて、つらい思いをしているのは私だけではないと知った。

「ミキ、頑張ろう。」

今度は、私がミキを抱きしめた。

地震から三か月が経った。今は夏季大会に向けての練習の真っ最中である。もうソフトボールなんてできないと思っていた私だったが、白球を追い、優勝を目指して頑張っている。その後、私は学区内にある団地に引っ越した。家の修理も本格的に始まっている。秋頃には自宅に戻れそうだ。

なくしたものはもう戻ることはないが、今を精一杯に過ごすことはできる。学校に来て、勉強をして、部活動に汗を流し、家に帰って、眠る。そしてまた朝がやってくる。当たり前前に過ごしている日々は、たまたま与えられたものではない。たくさんのお金の支えによって成り立っている、かけがえのないものだった。被災してたくさんの人に助けをもらうまで、私は気付かなかった。私は決してこのことを忘れてはいけない。

そして、つらかったときに多くの人からもらったものを、今度は私がだれかに、できるだけ多くの人に、伝えなくてはいけないと思っている。

奥津軽おくつがるにかける夢 〜白川公視しらかわひろし〜

「旧津島家新座敷つしま しんざしき」（五所川原市金木町かなぎちまう）でガイドさんのお話を聞いたお客さんは、誰もが顔をきらきらさせ、笑顔で満足した表情になる。中には涙ぐむ人さえいる。そのガイドさんとは、白川公視さん。自分の住まいである旧津島家新座敷を一般に公開し、作家太宰治ださいおさむの息づかいを感じてもらいたいという一心で走り抜け、はや五年が経っていた。

奥津軽を走る津軽鉄道金木駅から歩いて間もなく、ひっそりとたたずむ建物がある。旧津島家新座敷。新座敷は、太宰治つしましゅうじ（本名は津島修治つしましゅうじ）が文壇ぶんだんに登場してからの住まいとして、唯一現存する建物である。

戦後の混乱の中、津島家は屋敷やしきを手放すことになる。太宰治つしましゅうじの生家斜陽館しゃやうかんの離れとして建築された新座敷も数名の手に渡った後、呉服店ごふくてんを営んでいた白川家の所有となった。太宰ゆかりの建物であることを特に知られることもなく、店舗てんぽの一部として使われていたのであった。大勢の観光客が訪れる斜陽館とは違い、住民からも忘れられたままひっそりとたたずんでいた。

白川さんは高校卒業後、地元の金木町を離れ県外で暮らしていた。呉服店の次男として生まれ、いつかは自分のお店を持てればとひそかに思いながら家族と暮らしていたのである。そんな中、大きな転機が訪れた。



旧津島家新座敷（五所川原市金木町）

「近くのショッピングセンターに婦人服店を出すことになった。店長をやってもらおうので、今すぐ帰って来てほしい。」

お兄さんからの突然の連絡であった。

白川しらかわさん二十五歳。予想もしていなかった帰郷であった。白川さんは店長として必死に働いた。

ところが、まもなくして実家の跡取り※₃あとしとであった、そのお兄さんが退職して家を出てしまったのである。運命とはいえ、今度はお兄さんの代わりに父の呉服店こふくてんで働く生活になったのであった。しかし、年々経営が難しくなり、長年続いた呉服店をたむことになった。あとのことは決めていなかったのだが、その後の仕事について考える中で、

「新座敷しんざしきを公開して、太宰だざいファンに見てもらってはどうか。」

白川さんは、そんな思いを抱くようになった。

「しかし、いくら太宰ゆかりの建物であるとはいえ、全く知られていなかった場所にある。これまで呉服店を営み、生活の場として使用していた実家を公開したとしても、多くの人に訪れてもらうのは簡単ではないだろう。」

悩みが続く中、太宰の作品を何度も読み直してみた。

「訪れる人が再び太宰の作品を手にしたくなるような、作家の息づかいを感じられるようなガイドをしていきたい。」

『『人間失格』』というイメージで語られることが多かった太宰の別の面をもっとたくさんの人に知ってほしい。」

そのような思いが、日増しに強くなっていったのであった。

こうして、新座敷しんざしきを一般に公開することを決意し、自らガイドとして新たな道を歩むことにしたのであった。

公開後、新座敷に新たな展開が生まれ始めている。それは、人と人とのつながりである。新座敷を訪れたイラストレーターやアナウンサーなどいろいろな人との出会い。絵はがきの販売や新座敷を舞台とした朗読会などの開催。人がここに集いつど、自然につながっていくのである。

「いらつしやいませ。」

白川しらかわさんの優しさに包まれた表情が来客者を待ち受ける。

「津軽鉄道の発車時刻まで時間があまりないのですが、疎開そかいしていた頃の太宰だざいの様子を感じたくて訪れました。その時間までガイドをお願いしてもよいですか。」

白川さんは、お客さんの要望に応えながらガイドを進めていく。

「この部屋が津島家を勘当かんどうされた太宰が病床びょうしょうに伏した母タネとの再会を果たした場所です。」当時のエピソードを交えながら、目の前に太宰の息づかいが感じられるように語りかけていく。帰り際きざい、訪れたお客さんが、白川さんに次のように話しかけた。

「新座敷で過ごした時間は、私の財産です。作家の体温や声が伝わってくるような気がしました。太宰に寄り添えた感じがします。」

白川さんのガイドを聞いて心を揺さぶられた人がいる。まるでそこに太宰がいるかのような



白川公視さん（右）

錯覚さっかくに陥おちいる人がいる。決して文学青年だったというわけではなく、特別な才能があったわけでもなかった白川しろかわさんが、訪れた人の顔を輝かせ、時には涙させてしまうのはなぜだろうか。

白川さんは、笑顔で語る。

「父や母から受け継いだ新座敷しんざしきは、太宰だざいの古里にとって貴重な財産です。太宰とここを訪れる人。その点と点を、この空間でつなぎたいのです。そして、この町を訪れる人にとって、もっと広く太宰の世界を感じてもらえる新座敷でありたいのです。」

奥津軽にかける夢は果てしなく広がっていくのだ。

「私は、来ていただいたお客さんから恵めぐみをいただいている。ガイドとして新座敷を紹介することが、ちよっとした光になれば。」

白川さんの穏やかでありながら凜りんとした声が、今日も新座敷で太宰と訪れる人をつないでいる。

- ※1 文壇：作家や評論家たちの社会。文学界。
- ※2 斜陽館：太宰治が生まれた家。現在は資料館として公開されている。
- ※3 跡取り：家などを受け継ぐ人。



新座敷

下北から甲子園へ 富岡哲

とみおかさとし

おのみなと
大湊高校のグラウンドに大きく掲げられた「下北から甲子園へ」の文字。そこには毎日野球部員とともに練習に励む富岡哲さんの姿があった。

富岡さんは大湊高校野球部に所属して卒業後に日本大学へ進学し、選手としてだけでなく学生コーチとして野球の素晴らしさを学んだ。

そして、大学卒業後は野球を通して下北の子どもたちを大きく成長させたいと考え、自営業の傍ら、かたわ母校の大湊高校野球部の監督に就任し、長年、生徒たちの成長を見守り続けてきた。



ノックをする富岡監督

大湊高校のあるむつ市は、下北地方と呼ばれ、青森県の北東部に位置している。交通の便が悪く、寒冷な気候で、野球をやる上では決して恵まれた地域ではない。しかし、富岡さんには、そ

うしたハンデに負けずに、下北の子どもたちにも夢や希望をもたせたいという強い思いがあった。普段の練習でも、「敵は己自身」おのれ「礼儀や感謝の気持ち、人間性が大切」と繰り返し生徒たちに語りかけた。

とみおか 富岡さんは、野球は技術だけではなく、心の強さも重要であると考えていた。道具を大切にすることを通して相手や自分自身を大切にすることや、グラウンド整備時には腰をしっかり落とし、行うことなどを全員に徹底することによって、仲間とともに協力して取り組む姿勢を身に付けるよう繰り返し指導していた。また、落ちている「ゴミ」は、「運」だと思って拾うように指導していたことでも知られていた。

おおみなと その考えに賛同する監督も多く、大湊高校五十周年の記念大会には、当時の甲子園常連校が秋田県や宮城県、山形県などから大湊高校のグラウンドに集まり、熱戦を繰り広げた。

大湊高校に、甲子園出場のチャンスが見えたのは、監督就任から約十年がたった時だった。夏の県大会では三回戦で姿を消したものの、残った十三名の生徒たちに、「同じ高校生じゃないか。大切なのは気持ちだ。鍛え直して今度こそは負けないチームをつくらう。」

と熱い思いを伝え、それに応えたチームは秋の県大会を見事に制した。甲子園に手が届く位置にきていることが証明されたのだった。

しかし、翌年の夏の県大会では三回戦で惜敗せきはいしてしまった。富岡監督は三年生との最後のミーティングで、

「野球の甲子園には行けなかったが、これからはそれぞれの人生の甲子園を目指そう。」と話した。生徒たちはこの言葉を心に深く刻み、その後の人生の道標みちしるべとした。

その後も下北から甲子園を目指すべく、着実に力を付けていたチームだったが、富岡とみおかさんがいつもと違う体の不調を感じたのは平成十七年の春だった。教え子の工藤公治くどうこうじさんが新コーチとしてチームに加わり、関東遠征に行った直後だった。食欲がなくなり、疲れが抜けなくなったのである。

家族や周りの勧めもあり病院で精密検査してみると、進行性の病気であることがわかった。すぐにも入院して治療をする必要があったが、富岡さんは悩んだ。治療にはかなり時間がかかることが予想された。冬の間も一生懸命に練習に取り組んできた生徒たちとともに、目前に迫った夏の県大会を戦いたいという強い気持ちがあった。今、チームから離れるわけにはいかない。自分を慕したって入学してきた生徒たちに、伝えたいことはまだまだたくさんあった……。

富岡さんは悩みに悩んだ末、最終的には、病気と闘うことを決意して入院した。工藤コーチは「夏までには帰ってくる」という監督の言葉を信じた。監督のユニフォームをベンチに掲げ、「責任」「自覚」「誇り」という教えを胸に、県大会に向けてチーム一丸となって頑張ることを誓った。

しかし、病気の進行の方が一步早かった。一時期は回復の兆しも見えていたのだが、その年の六月に富岡とみおかさんは夢半ばにして亡なくなった。通夜には千人以上の弔問客ちょうもんが訪れ、葬儀では約三百人も人があまりにも早すぎる別れを惜しんだ。

残された生徒たちと後任の監督となった工藤コーチは、甲子園出場を目指して奮闘することを強く胸に誓った。平成十九年の夏の県大会の抽選会では、育成功労賞を受賞した監督の遺族の前で、

「富岡監督とともに大湊おおみなと高校の野球をしたいと思います。」
と、主将が堂々と宣言した。

二年後。夏の県大会の決勝には大湊高校の姿があった。惜しくも敗れたものの、甲子園まであと一步というところまで迫ることができたのだ。

富岡監督の亡き後、その思いは教え子たちに引き継がれている。秋の県大会を制した時の主将で捕手だった工藤コーチは富岡監督の後任として大湊高校の監督となり、投手だった飛内とびない尚人なおとさんはむつ工業高校の監督になった。

「下北から甲子園へ。」

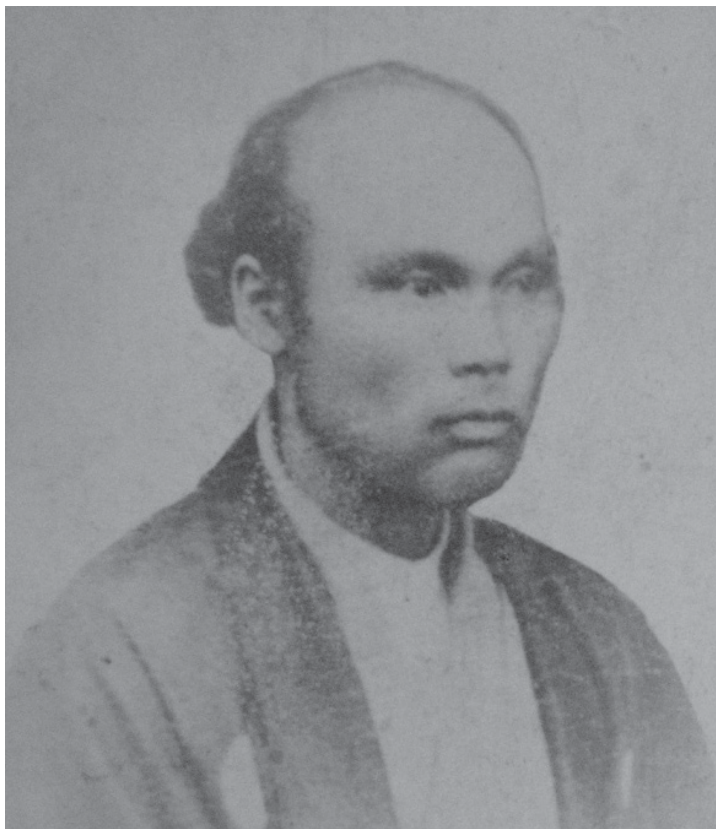
富岡さんの思いは、今も下北のグラウンドに脈々と息づいている。

洋式牧場の先駆者 せんくしや 〜 廣澤安任 ひろさわやすとら 〜

廣澤安任は、会津藩あいづはんの下級武士の家の二男として生まれた。父の勧めで学問の道に進み、十二歳で藩校日新館にっしんかんに入学、二十八歳で幕府の大学である昌平坂学問所しょうへいざかがくもんじょに入学し、学問を修めた。

明治元年（一八六八年）、安任三十八歳の時、戊辰戦争ぼしんに敗れた会津藩は、陸奥国むつのおくに（現在の青森県三戸、下北、上北の三郡と岩手県の二戸郡の一部）に移住することになった。名前は会津藩から斗南藩なみはんに変わり、安任※1しょうさんじは少参事という役職に任命された。移住した直後、藩士たちとその家族の生活を支えることが一番の課題となった。

斗南藩の人々の生活は大変苦しく、住む家も雨風をしのぐのがやっとの状態であった。生きるために、家畜のえさにとっておいた大豆や山菜だけでなく、ありとあらゆる野草を手当たり次第に食べるような状況であった。武士であった人々が刀を鎌かまや鋤くわに持ちかえて開墾かいこんを始めたが、「やませ」が吹くこと、農業の経験がなかったことで、思うように進まなかった。農業には向かない自然環境だったので、農業以外で生計を立てる方法を考えなければならなかった。



廣澤安任（三沢市先人記念館）

明治五年（一八七二年）、安任やすとうはこの地が馬の産地「木崎野牧」きざきのまきであることから、牧場の経営に立ち上がった。資金がない安任だったが、経済的に自立した「自主の民となるべし」という強い思いと、「日本が世界に通用する国になるためには、外国のよい点を取り入れることが、国力の向上につながる」という考えから、新政府に牧場開設を願い出たところ、許可を得ることができた。牛、馬などを飼育し、食肉や牛乳などの乳製品を作り販売することで、日本人の食生活の向上につながるということも視野に入れてのことだった。そこで、牧場の技術指導にあたる牧夫ぼくふのマキノと通訳のルセーの二人のイギリス人と契約し、呼び寄せた。

彼らの指導のもと、牛や馬を飼育することに取りかかった。これまでは人力ですべて開墾していたが、馬を使って土地を耕す「馬耕」ばこうを取り入れた。道具作りにも取りかかり、それまで刀を作っていた鍛冶職人かじを呼び寄せて、地面を起こす「プラウ」と土を細かく砕く「ハロー」という洋式農具を作らせた。また、外国の牛馬を取り寄せて日本の牛馬と交配し、体格や肉質に優れた子孫を残すことにも取り組んだ。明治五年（一八七二年）に牛百八十三頭、馬九頭、豚三十頭で始めた牧場が、明治九年（一八七六年）には、牛三百頭、馬二十七頭を飼育する大牧場になり、この土地が牧畜に適していることを証明した。



ハロー（三沢市先人記念館）

この年、政府の中心として活躍していた大久保利通は、安任に会うために牧場を訪れ、

「政府の役人になって、国家に尽くしてほしい。」

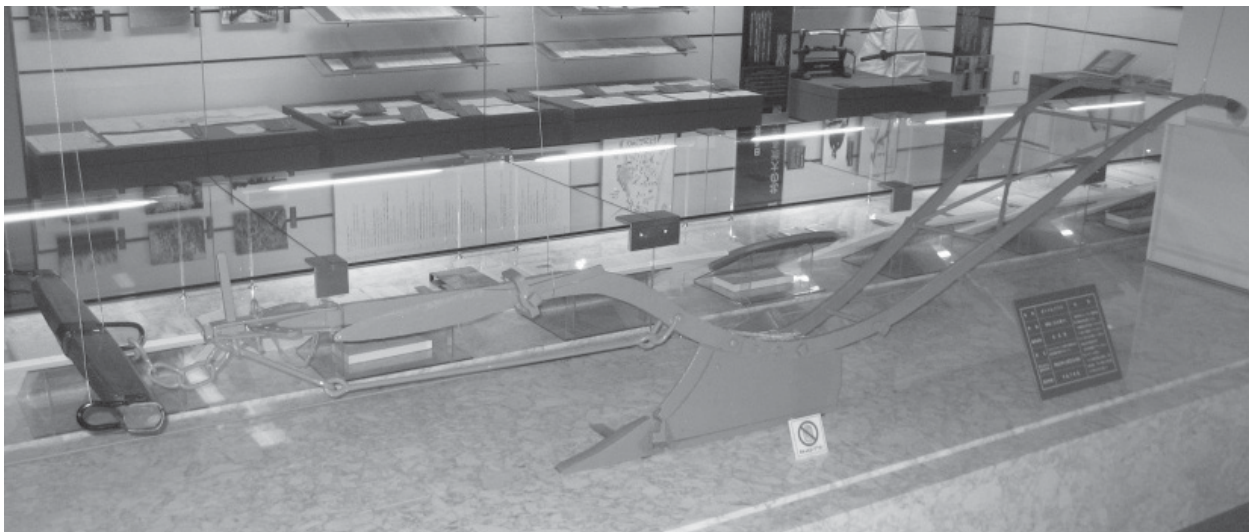
と勧めた。しかし、安任は、

「野にあつて国家に尽くす。」

と、申し出を断った。

明治十二年（一八七九年）には、『開牧五年紀事（青森県版）』を刊行した。この本は、安任が牧場を開いてから五年間に行った具体的な取り組みやかかった費用などを、詳しくまとめたものであった。この本は、地域の牧畜に携わる人たちの参考書として活用された。また、安任は牧場で学びたいという人々を受け入れ、技術を惜しみなく伝えていった。この影響によって、三沢市や上北郡にたくさんのお牧場が再び作られ、軍馬飼育の一大産地となっていた。

それでも牧場の経営は、楽なものではなかった。しかし、三沢村（現三沢市）でコレラが大流行したときには衛生費を寄付したり、倉内村（現六ヶ所村倉内）で大きな火災があったときには松の木を百五十本寄贈したりと、地域に災害が起こると、積極的な



プラウ（三沢市先人記念館）

支援を続けていった。

晩年、安任は漢詩を残している。

碌々^{ろくろく}偷生^{ゆうせい}四十年^{しじゅうねん}東車^{とうしゃ}西馬^{せいば}の跡^{あと}相連^{あいづら}なり 故人^{こじん}若^もし問^もえば芳草^{ほうそう}池^ち塘^{とう}牛^ね睡^むる辺^{あた}りに在^あり

(訳：四十年、東に西に駆けずり回った石ころのような人生。今、私のことを尋ねる人があったら、牛の寝そべる草薫る池の堤のあたりで暮らしていると伝えてください。)

明治二十一年（一八八八年）、安任は、五十八歳の時に、長男の弁二^{べんじ}に牧場を譲^{ゆず}り、現在の東京新宿駅西口付近に牧場を作り、牛乳などの販売を始めた。しかし、明治二十四年（一八九一年）、安任は六十一歳で急逝^{きゅうせい}する。

たくさんの苦難を乗り越え、走り回り、人のため、国家のために尽くした生涯であった。

※1 少参事：藩の中で、藩知事、大参事に次ぐ三番目の地位。

※2 衛生費：疾病予防などにかかる経費。

離島民とともに ↳ 笹森儀助

弘前に生まれた儀助は迷っていた。大阪府の砂糖をつくる会社の責任者となるか、それとも、鹿児島県の奄美大島の島司（支所長）となるか、決めかねていたのである。大阪府の会社へ行けば、楽な生活ができることは目に見えている。

しかし、儀助は大島の人々の恵まれない生活状態を忘れることができなかつた。それは明治二十六年（一八九三年）、南島地方（今の沖縄県）を視察した帰りに、儀助はこの島々を調査したことがあつたからである。

生活は貧しく政府から見捨てられながらも、素朴で純真な心を失わず、必死になつて生きている島の人々に対して、深い同情をいただいたのであつた。

「この島々の人たちの生活を楽にしてやれるのは自分しかない。これからの人生をこの島の人たちのためにささげよう。」

儀助はこう決心すると、心がはればれとして青年のような情熱が、体の中からわいてくるのを感じた。

こうして明治二十七年（一八九四年）八月、儀助は三女つるを連れて奄美大島の島司となつた。その頃は、人生五十年とよく言われた時代で、生きて再び故郷に帰れないと考えて、つるを連れていったのである。儀助は五十歳であつた。

大島での初めての仕事は、奄美周辺の諸島を調査して、その実態を知ることであった。儀助は船で嵐にあい、生死不明と伝えられるような困難とたたかいながら、四か月間にわたって島を巡った。島民と同じ服装で、食事もまた島民と同じさつまいもを食べながら話し合い、島民の要望を聞くことにとめた。

諏訪瀬島へ上陸したときのことである。火山灰とたたかい、草の根を食べながらこの島を開拓した藤井富伝という立派な人に会って、その苦労話を聞くことができた。

かつて、儀助自身も津軽の岩木山ろくの常盤野に酪農を中心にした「農牧社」という牧場をつくり、開拓の苦労は身をもって体験したことがあったので、苦しさを乗り越えて、ひたすら理想に向かって生きるこの開拓者の生き方に深く心を打たれた。儀助は、藤井富伝の偉大さを島民に知らせ、勇気をふるいたたせるために『藤井富伝略伝』を著わした。

儀助は島民の生活を豊かにするために、次々、手を打って農地開拓を進めたが、島の人々の古い因習や習慣、迷信などにぶつかることがあった。ある日のことである。

「お父さん、島の人たちは仕事を止めてみんな山の方へ走っていくよ。どうしたのかしら。」
つるが、びっくりした声で言った。

「さつまいもの植え付けの時期なのに、なんで山の中へ行くのだろう。」

儀助は不思議に思つて、村人に聞いたすと、

「島に悪い病氣（天然痘）がはやつたので、山の中に隠れてしまふのだ。」
という返事であつた。儀助は、

「正しい手当てさえすれば、そんなに恐れる病氣ではない。」
と言つて病氣の患者を見舞い、人々を説得して歩いた。

ところが、ある日、半鐘が鳴つて、もっと驚くべきことが起こつた。

「半鐘だわ。火事かしら。」

つるが驚いて言つた。

「どれ、見てくるか。」

儀助が外へ出てみると驚いたことに、たくさんの人が手に手に薬効があると言われている芭蕉の葉を持って自分の家の方へやってくるではないか。人々は、

「この家に悪い病氣が入つた。追い出そう。」

と叫びながら、儀助の家を取り囲み、芭蕉の葉で打ち始めた。儀助は必死になつて説得したが、こうした状態は数日間続いた。

儀助はこのことがあつてから、島の人々の教育に取り組むことになった。学力の優秀な者には賞を与えたり、優れた教師を大島で再教育する制度を設けたりした。そして、島々から女



南島を調査する笹森儀助

子を数人ずつ選び、宿舎に寄宿させて礼儀作法や学校教育を受けさせた。それは、やがて彼女たちに島の教師になってもらい、離島民の中心になってもらいたいからにはほかならなかった。このように、儀助は奄美大島の調査活動を基にして農地を開拓させ、島の産業である黒砂糖の生産を高め、島民の生活を向上させた。島の人々の考え方も、教育の力によって少しずつ変わっていったのだが、鹿児島にある本庁からはよく思われなかった。あまりにも島民の側に立ち過ぎる、ということによって儀助は四年間で島司をやめざるをえなくなった。

その後の儀助は、朝鮮の日本語学校の校長などとしたが、青森市に帰って青森市長になり、市の発展に尽くした。商業補習学校（今の青森商業高校）を設立したのもそのときである。

こうして、大正四年（一九一五年）、故郷の弘前市で七十一歳の生涯を閉じた。

岩木川治水を手がけて
長尾角左右衛門



津軽平野をうるおしながらゆうゆうと流れ、十三湖へそそぐ岩木川は、「津軽の母」といわれている。だが、この川も昭和三十五年（一九六〇年）、その上流に目屋ダムが完成するまでは、雪どけや台風の季節になると毎年のように洪水になり、流域の人々を悩ませていた。

明治十八年（一八八五年）春、北津軽郡三好村（現在の五所川原市）は、雪どけの水が岩木川にあふれて大洪水となった。ゴウーゴウーと不気味なうなり声をたてて流れる川が、橋や堤防を破壊し、立木を根こそぎえぐり家を流していく様子を、恐ろしさにふるえながら見つめる少年がいた。

「ああ……、この洪水さえなければ、この村はどんなに豊かで住みよい所になるだろう。」
と、少年は思った。この少年が長尾角左右衛門である。

やがて、成長し、村役場の書記になった角左右衛門は、岩木川水害の資料を読み、先人の苦しみと努力の跡を知ったのである。治水には長い年月とたくさんの資金が必要なことも分かった。

「治水の仕事は、青森県だけの力ではとてもやれるものではない。流域の人々がまとまって、国にお願いするしか方法はない。自分は、そのために働こう。」
角左右衛門は、そう決心したのであった。

明治二十九年（一八九六年）、彼が二十六歳のとき、人々から推されて郡会議員に当選し、土木関係の仕事を担当することになった。角左右衛門はひそかに、長い間の夢であった岩木川治水の仕事をするときがきた、と思った。そして翌年、同士たちとともに「岩木川改修期成同盟会」をつくった。角左右衛門は常任幹事となって資料の調査や書類の作成など、国にお願いする仕事の中心となって働いた。

この頃から角左右衛門は、岩木川に関するあらゆる資料を集め始めた。本当の治水計画を立てるには、岩木川そのものの性質をもっと研究する必要があると考えたからである。彼は毎日のように資料を読み、そして、機会あるごとに現地調査をした。

川端の現地調査をしていたある日のことである。
「助けてくれ。」

必死になって叫ぶ角左右衛門の声が聞こえた。友人が行ってみると、彼は身長をこえるアシガヤの中で、胸までつかりながら木の根につかまり、身動きでき



ない状態であった。土手の上から見ただけでは不正確なので、草を踏み分けて調査しているうちに、ぬかるみに足を取られてしまったのである。木の根がなければ死んでいたかも知れないのである。こうして角左右衛門は生命の危険を冒しながらも、根気よく調査活動を続けた。そのため、彼の調査は正確で誤りがなかった。

このようにして調査した資料を基に岩木川改修調査書をつくり、国会や政府に機会あるごとにお願ひし続けた。この説得力ある資料と地域住民の熱意に動かされて、大正七年（一九一八年）、岩木川の改修工事は、国家の事業としてやることに決まったのである。活動を続けて、実に九年目であった。五所川原市には国の工事事務所も置かれ、すぐれた技術者も来て、工事の槌音が津軽の野に力強く響きわたった。

ところが昭和十年（一九三五年）八月、今まで降ったことがないほどの雨が津軽地方をおそい、記録的な大洪水になってしまった。そこで、今までの治水計画を根本的に見直さなければならなくなり、ふたたび同盟会の活発な活動が始まった。このとき、同盟会の会長になっていた角左右衛門は、工事事務所長に、

「所長さん、今までのように、川幅を広くしたり堤防を築く方法では、根本的な治水にならないのではないでしょうか。」

と強く訴えた。所長は腕を組み、しばらく考え込んだ。やがて、角左右衛門をまっすぐ見つめ、切り出した。

「もはや、岩木川の上流に治水とかんがいと発電を兼ねた多目的ダムをつくるより方法はないでしょう。しかし、これをつくるには、村を一つ湖底に沈めなければなりません。大変な仕

事になりますよ。」

「分かりました。私たち同盟会が努力しましょう。」

こうして目屋ダムの構想ができ上がり、昭和十一年（一九三六年）に「目屋ダム期成同盟会」を結成したものの、戦時中のため活動は進まず、やがて、中止になってしまった。

それでも、角左右衛門の意志は揺らぐことはなかった。十七年の時を経て、昭和二十八年（一九五三年）ようやく工事が始まり、目屋ダムが完成したのは、昭和三十五年（一九六〇年）、実に二十八年もの歳月がかかったのである。ダム建設によって、生活の地が湖底に沈むことになる、西目屋村砂子瀬地区の人々との移転交渉には、かなりの時間と労力を費やした。

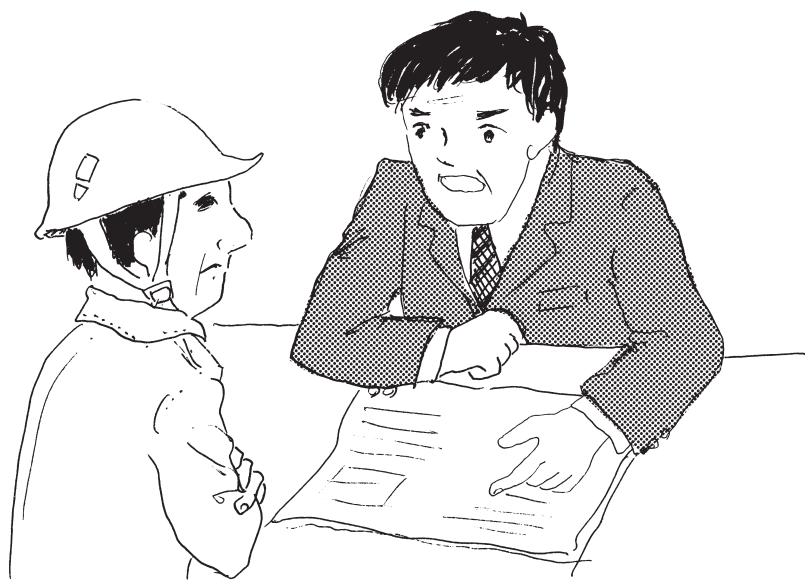
終戦後、角左右衛門は第一線をしりぞいて、約五十年かか

って集めた岩木川に関する資料を整理して、出版する計画を立てた。そして、昭和四十年（一九六五年）『岩木川物語』を出版したのである。

この本は、津軽を解明する百科事典といわれ、各方面から高く評価された。

角左右衛門は岩木川治水の功績が認められ、昭和四十三年（一九六八年）第二十一回東奥賞を受賞した。それから、二年後、彼は九十歳の実りある人生を閉じた。

※ かんがい：農地に外部から人工的に水を供給すること。



袈裟掛けの松 ↳ 法身禅師 ↳



法蓮寺境内にある法身堂にまつられている法身禅師像

鎌倉時代の中頃のことです。現在の十和田市を中心とする三本木原は、当時「三本木平」と呼ばれ、人々は厳しい自然条件の中で暮らしていました。そのころ、洞内（現在の十和田市）に住む豪族の由之進は、法蓮寺を建立しました。それは、七戸（現在の七戸町）の中野川の上流にある倉岡で修業していた名高い和尚様をお迎えするためでした。

法身禅師。それが、その和尚様の名前でした。

禅師は、村々を回り、地域の人々の相談や悩みに真剣に耳を傾け、仏の道を説きました。また、農業の知識も豊かで、自ら田畑に入り、額に汗して働きながら作物の育て方や、道具の使い方を広めました。禅師は、田んぼに入って働くとき、袈裟が泥で汚れないように、決まって近くの松の枝に掛けたそうです。地域の人々は、いつしか、その松を「袈裟掛けの松」と呼ぶようになりました。

法身禅師は、文治五年（一一八九年）、常陸国真壁郡猫島村（現在の茨城県筑西市）で生まれ、幼いときの名前を福蔵といました。三歳のときに母を亡くし、その後は父の手で育て

られたそうです。二十三歳になった福蔵は、名前を平四郎と改め、真壁の殿様の草履取りとして仕えることになりました。

ある冬、殿様を囲み、「雪見の会」が開かれた時のことです。館に帰ろうとした殿様は、玄関にそろえられた草履を置いた瞬間、大声をあげました。

「下郎、ここへ参れ。」

平四郎は、その声に慌てて、殿様の前にひざまずきました。

「無礼者め。この温かい履き物はなんぞ。きつと尻に敷いていたのであろう。」

平四郎がわけを話そうとした時、草履が平四郎の額に激しくぶつかりました。額がパツと割れて、血が地面の雪を赤く染めました。平四郎は、あまりの出来事に身動きすらできませんでした。

「殿様が幼い頃からお守りをし、どんなに健やかな成長を願ってきたことか……。はだしのままで履かれる草履を少しでも温かくしたいと願い、懐に入れておいたのに……。」

長年、真心を込めて仕えてきた殿様に気持ちを伝えることもかなわないまま、平四郎は、殿様の草履を懐に入れ、長年仕えた館を去り、あてのない旅に出ました。生きる望みを失った平四郎が、自らの命を絶とうと、道ばたの松の木に縄を掛けたときです。

「どんなにつらいことがあったか知らないが、訳を聞かせてくださらんか。」

振り向くと一人の旅のお坊さんが立っていました。平四郎は、これまでのことを話しました。

「そんなに悔しいのなら出家し、修業を重ねて立派なお坊さんになりなさい。そうすれば、き

つと自分の生きる道を見つけることができるでしょう。」

平四郎の心は大きく揺れましたが、その言葉に導かれるように高野山建仁寺で仏の道に入ることを決意しました。そのとき、平四郎は四十歳を越えており、とても遅い出家でした。しかし、住職の行勇から性西法身という名前を授けられた平四郎は、厳しい修行に一心不乱に打ち込みました。その姿を見た行勇は、この人こそ立派なお坊さんになれる人だと考え、性西法身に宋の国（現在の中国）へ修業に行くことを勧めました。嘉禎二年（一二三六年）、四十八歳になった法身は、宋に渡る決意をしました。

法身は、宋の国で五本の指に数えられる、有名な径山興聖万寿禅寺に入り、厳しい修行を続けました。体の痛みや心の迷いが消えるまで、来る日も来る日も座禅に取り組み、数年後ようやく悟りを開くことができたそうです。法身は、その後も精進を重ね、宋の国でも名高い僧になりました。

こうして法身禅師は、宋の国での九年間の修業を終え、日本に帰りました。そして、京都や鎌倉などを周り、仏の教えを広めながら、生まれ故郷の真壁に戻ってきました。すると、各地から禅師のうわさを聞いたお坊さんが、たくさん集まるようになりました。

ある日、真壁の殿様は、近くの村に宋の国で修行を終えた立派な和尚様がいると聞き、禅師を館に招きました。法身禅師は、殿様と家来たちを前にして、仏の道を説きました。その話は分かりやすく、わが子を諭すようで、集まっていた人たちの心を打ちました。禅師は、ひとりお話しが終わった後で、殿様にあのかのときの草履を差し出して、言いました。

「私に見覚えがありませんか……。私は、あなたの草履取りをしていた平四郎でございます。」

殿様は、たいそう驚き、訳も聞かずに乱暴してしまつた自分を心から恥じました。そして、涙を浮かべ禅師の前に手をついて謝りました。禅師は、静かにその手を取ると話しかけました。

「あなたは私の恩人です。もしも、この草履がなかったら、私は草履取りのままの平四郎で終わっていたことでしょう。」

今の私があるのは、この草履のおかげなのです。」

その後、法身禅師は、仏の道を通して、人と人との和を大切にすることなどを真壁の人々に広めました。たくさんの方が禅師を厚くもてなし、敬うようになりました。しかし、ゼいたくな生活や有名になることを避けるように、禅師は、再び修業の旅に出ました。そして、陸前松島（現在の宮城県）を経て、七戸まで修業の旅を続け、最後に洞内にたどり着いたのです。

法身禅師は洞内で八十五歳の生涯を閉じました。禅師が亡くなると、その徳を慕う多くの人々が集まり、「袈裟掛けの松」が見える小高い丘にお墓をつくり、手厚く葬りました。その場所が、「法身塚」と呼ばれ、多くの人がお参りするようになりました。

今も毎年九月になると、地域の人々はその年の収穫を感謝する「法身祭」を開き、法蓮寺は法身禅師をしのぶ人々にぎわっています。



洞内に建立された法蓮寺

孤児院のオドサ
佐々木五三郎



佐々木五三郎

が、青森県で最初の孤児院「東北育児院」を創設した佐々木五三郎である。

五三郎は、明治元年（一八六八年）に弘前市富田とみに生まれた。しかし、生後間もなく母と死別し、十歳の時には父も失ったため、近所で米つき屋を営む成田家の里子となった。青年時代の五三郎は、成田家の一員として米つき場で働きながら東奥義塾とうおうぎじゅく（現在の東奥義塾高等学校）で学んだ。

明治二十六年（一八九三年）、生家の佐々木家を継ぐことになった五三郎は、弘前市本町ほんちようで

明治三十五年（一九〇二年）、青森県は冷害による大凶作きようさくに見舞われ、食べ物を求める身寄りのない子どもたちの姿が数多く見られた。衣服はぼろぼろで垢あかにまみれ、中には病気で苦しむ子どももいたという。しかし、当時、県内にはこれらの子どもたちを保護し救済する施設が整備されていなかった。この惨状さんじように心を痛め、私財を投げ打ち、身寄りのない子どもたちを自宅に引き取って世話を始めたの

菜種商を営むことになった。翌々年には結婚し、妻たか子と新たな生活を始めたのは、五三郎が二十八歳の時である。

ところが、二年後、一族の事業が失敗した影響を受け、店は人手に渡ってしまふことになった。財産の全てを失った五三郎が、身を粉にして働き、ようやく店を取り戻したのは四年後の明治三十四年（一九〇一年）のことである。この体験は、五三郎が後の苦しい生活を乗り越えていく強い信念を培うものになった。

この年、子どもたちの惨状を見過ごすことができず、自宅で「東北育児院」を始めた五三郎であったが、入院した子どもたちとの生活は困窮を極めた。五三郎と妻たか子は、二十人あまりの子どもたちと寝食をともし、自分の子どもと同じように毎日の世話を続けた。しかし、乏しい家計をやりくりし、多くの子どもたちを養っていく苦労は並大抵ではなかった。当時、国からの補助金等は全くなかった時代である。そこで、五三郎は、育児院を維持・運営するため、やむなく子どもたちと行商を始めることにした。ちり紙、ローソク、石けん、マッチ等売り歩き、わずかな利益を求め、必死になって育児院の運営を続けた。

「諸君よ、諸君よ。」

商品が売れなくなると、五三郎は街角に立ち、孤児の救済を訴える演説を行った。

「血も涙もある弘前の市民よ。凶作のために孤児になった子どもたちが、今苦しんでいるのだ。」

柄のついた鈴を振り、手織りの着物、白い緒の下駄を履いた五三郎の姿は評判となり、次第に協力の手を差しよべる人や、寄付を申し出る人が現れるようになったという。

中には、「身寄りのない子どもたちを働かせて利益を得ている。」といった心ない言葉を浴びせる者もいた。しかし、五三郎の信念は少しも揺らぐことはなかった。それどころか、五三郎は今まで以上にわが道を突き進んでいった。

「孤児院のオドサ、でただゲダコ履いて、鈴持って、ガランガラン。（孤児院の父さんは、大きな下駄を履いて、鈴を持ってガランガランと鳴らしている。）」

そんなふうにならわさされるほど、五三郎は町を毎日歩き続けた。

創設から四年後、「東北育児院」の収容児は三十四名に達し、行商のわずかな利益だけでは維持できない状況になったが、それでも五三郎は、独立自営の信念を曲げることがなかった。

明治四十一年（一九〇八年）、映写機を手に入れた五三郎は、巡回映画班を編制し、各地を巡業し始めた。映画一本の映写時間は五、六分程度で内容も幼稚なものだったが、当時は映画



五三郎と子どもたち

自体が珍^{めずら}しく、次第に安定した収入を得られるようになってきた。それにより、子どもたちの食事は、オカラやジャガイモから麦飯に変わっていった。

しかし、順調であった巡回^{じゆんかい}映画は、映写機一式を全焼するなどしたため中断することがあった。巡業の不安定さを痛感した五三郎^{ごさぶろう}は、常設映画館の建設を決意した。

大正三年（一九一四年）、映画館は、五三郎が一生の悲願とした「慈善^{じぜん}」の二文字をとって「慈善館」と命名され開館した。五三郎は、幕間^{まくあい}ごとに壇上^{だんじょう}に上がり、観客に「諸君よ。」と呼びかけ、孤児の救済や社会福祉事業の必要性をうったえ続けた。

こうして五三郎は、七十八歳で病没^{びょうぼつ}するまで慈善事業に取り組み、「孤児院^{こじいん}のオドサ」であり続けたのである。

現在、「東北育児院」は「弘前愛成園^{あいせいえん}」と名称を変え、児童養護施設ばかりではなく、養護老人ホームや保育所などの社会事業を幅広く行い、地域の社会福祉に大きく貢献^{こうけん}している。佐々木五三郎の信念は、今も生き続けているのである。



慈善館

日本で最初に予防接種をした男

中川五郎治



中川五郎治（函館市中央図書館）

中川五郎治は江戸時代後期の明和五年（一七六八年）、下北の川内（現在のむつ市）で生まれた。若いころに松前やエトロフに渡り、漁業や商業に従事していたが、ロシアの軍艦に捕らえられてシベリア（ロシアの北部）に連行された。シベリアでは日本に帰るために二度の脱走を繰り返したが、いずれも失敗を繰り返したが、いずれも失敗

敗し、その間に天然痘という伝染病を予防する方法を見聞きして、帰国後、松前で日本で最初に種痘（天然痘の予防接種）を行った人である。

文化十年（一八一三年）、五郎治は松前（現在の北海道松前町）に移り住み松前藩の役人として働き始めた。

それから十一年後の文政七年（一八二四年）、松前に天然痘が流行した。天然痘というのは「死に病」と言われ、「体中がうみだらけになって高い熱にうなされ、八〇パーセントの患者が一週間ほど死んでしまい、奇跡的に治っても体中にあざが残る」というとても恐ろしい病気だった。

当時の日本の医学ではこれを治すことは不可能だった。だから、人々は天然痘にかからないようにと体中に鍋の底の墨を塗りつけ、赤い布をまとってただ祈るしかなかった。しかも、この病気は空気感染するので、かかった病人は子どもであろうと一人家に残され、家族は山中に逃げ込んでしまうのだが、その人々の中には、食糧の欠乏により山中で餓死したり、冬には凍死したりする者が多くいた。また、松前藩では、天然痘が発生するとすぐに役人を派遣して地域間の移動を禁止し、天然痘の流行を最小限に食い止めようとした。これにより発生地域は完全に陸の孤島になってしまったのだった。

「何とかして、天然痘から人々を救うことができないうのだろうか。」
と思いつけていた五郎治は、ロシアから持ち帰った一冊の本を思い出した。それはシベリアにいた時にロシア人からもらった『オスペンネエケニガ』という本で、天然痘を予防する方法（種痘）について書かれてあるものだった。あいにくその本は幕府に取り上げられてしまったが、書かれている内容を五郎治はだいたい覚えており、実際にその種

痘を見たこともあつたのだ。

しかし、五郎治は自分にその種痘ができるかどうか不安だった。なぜなら五郎治がシベリアでその種痘を見たのはもう十五年以上も前のことであり、その記憶も少しずつ薄れてきていた。そして、もっとも不安だったことは種痘は天然痘の種がなければできないということだった。普通は天然痘にかかった牛からその種を取り、それを人に植え付けるという牛痘種痘法というやり方が一般的だったが、そうした牛を見つけることは当時の日本ではかなり難しかった。そのため、五郎治は、天然痘にかかった牛がいたらすぐに知らせてくれるように各地域の牛を飼っている農家に頼んでまわった。

しばらくしたある日、ある農家から自分の家で飼っている牛が天然痘にかかったようだという知らせが入り、五郎治はさっそく大野村（現在の北海道北斗市）に出かけた。そして、その牛から天然痘の種をとり、大急ぎで松前に戻った。そして、十一歳になる商人の娘に種痘を行った。四日後、娘のうでに赤い斑点が見られた。五郎治の種痘は成功したのだった。そのとき、五郎治は川内のハナという娘のことを思い出した。ハナは五郎治の家の近所の娘で、五郎治が十八歳のときに、天然痘にかかりわずか十三歳で死んでしまったのだった。「種痘をしてさえいれば、ハナは死ななくてもよかつたのに。」と五郎治は悔しさと胸がいっぱいになった。そして、「種痘を一人でも多くの人たちにし

て、ハナのような目にあわせないようにしなければ。」と五郎治は強く思った。

その後、五郎治は商人の娘のかさぶたをとって種にし、希望する人に次々に種痘を行った。そのおかげで松前ではたくさんの人たちが天然痘にかからずに済むようになった。しかし、

「天然痘の種を植えつけるなんて気持ち悪い。」

と言って、相手にしない人がまだたくさんいた。五郎治は、

「この種痘をすれば、恐ろしい天然痘にかからずに済むんだ。なぜ、みんなは分かってくれないのか。」

とくやしがあった。こうした周囲の偏見の中で、五郎治は八十一歳の長い生涯を閉じるまで、松前でたくさんの人たちに天然痘の予防接種を行い続けたのだった。

世界で初めて種痘を実施したのはジェンナーで、寛政八年（一七九六年）だった。その方法が長崎に伝わり、明治四十二年（一九〇九年）種痘法が制定された。どの子も必ず種痘することになり、天然痘にかかる人は激減して、昭和三十年（一九五五年）に我が国では天然痘が根絶された。世界では、WHO（世界保健機構）が昭和五十五年（一九八〇年）に天然痘が世界中から撲滅したことを宣言した。

これは五郎治が初めて種痘をした年から百五十六年後のことであった。

猪飢渴を見つめた人　　く安藤昌益く

江戸時代中頃、八戸（現在の八戸市）の町に一人の医師が現れました。その人の名は安藤昌益といました。

昌益は、町の中心地に、町人を診る医者として開業しました。昌益は、患者に親切で診断も確かな名医だったようで、武士まで治療したことが「八戸藩日記」に記録されています。

昌益は医学のほかにも、仏教の修学を通して得た幅広く深い知識をもっていました。ほどなくして、昌益のもとに、その人柄と学問の深さにひかれた人々が集まってきました。そこで、昌益は塾のようなものをつくり、神山仙庵や高橋大和守などの門人を指導しました。昌益は、

「私が八戸にやってきたのは、何かにひかれてやってきたような気がする。人々は皆一生懸命働き、農民は力を合わせて大地を耕し、種をまき、育てていく。時が満つればその実を刈り取り、それをたくわえる。そして、自然の大いなる恵みに感謝し、生き生きと働いている。その姿を見ると、遠い昔の自分の姿を思い出し、ついつい心がふるえてくる。八戸には京や江戸にはなかつた美しい自然が身近にある。」

八戸藩二万石は、寛文四年（一六六四年）盛岡藩から分かれ誕生しました。領内は火山灰の大地が多く、稲作に適した土地が少なかつたのでイネのほかソバ・アワ・ヒエ・大豆などの雑穀を栽培していました。馬の飼育にも適していたので、数多くの牧場がありました。

自然の恵みが豊かで美しいこの地方に生きる人々が、最も恐れていたものがありました。それは「やませ」です。やませは、主に夏から秋にかけて太平洋から吹きつける冷たく湿った東風です。やませに最も弱かったのがイネで、このやませが強い年は凶作となり、飢饉が発生して、多くの人々が亡くなりました。

昌益が八戸に暮らしてまもなくのことです。人々は、これまで体験したことがないできごとに見舞われることになりました。

「延享三年（一七四六年）より猪が多くなり田畑を荒らし始めた。それが寛延二年（一七四九年）になって非常に多くなり、人々は大変暮らしに困ってしまい、秋十月頃になると、窮民となって八戸の町に現れるようになった。翌年の麦を刈る頃までの領内の餓死者は、四千六百人であったことが聞こえてきた。そして、宝暦二年（一七五二年）三千人ほどの人々が餓死したことがわかった。」

これが世にいう猪飢渴だったのです。

ある日、昌益の家を、門人の神山仙庵が訪ねてきました。

「先生、今年の猪は大変です。大群で里に下りてきています。猪に追われ飢えた人々が八戸までたどり着き、そして、次々と命を落としています。」

「私は医者だ。もう何十人も最後を診とった。その人たちは、水さえ口にする体力もなくなつて、むなしく死んでいった。毎日毎日人々がこうして死んでいく。今ほど自分の医者としての無力さを感じたことはない。」

藩の役人も農民もこの猪の猛威に対して、ただ手をこまねいていたわけではありません。何百人もで猪狩りを実行したり、猪の退散を願った石碑を神社に建てたりしました。

しかし、それらの努力もむなしく、猪の猛威は数年続きました。

「猪は、昔からこの地方にいた動物である。それがまるで地獄の底から湧き出る悪獣のようになつた。自然が狂つたとしか思えない。食べ物を作っている農民がバタバタ死んでいく。

これはなぜなんだ。」

人々を苦しめ死に至らせる猪飢渴を目の当たりにした昌益は、これをきっかけにして飢饉の原因を真剣に考えていきました。

猪飢渴も下火になってきた頃、再び仙庵が昌益の家を訪ねてきました。

「先生、猪飢渴は大分落ち着いてきたようですが。」

「神山君、私は猪飢渴をきっかけにして、飢饉がなぜ起きるのかずっと考えてきた。やませや猪といった自然の力だけではないような気がするのだ。」

昌益は仙庵を見て、ゆっくりとした口調で言いました。

「私は、猪飢渴は大豆が原因で起こったと考える。」

「大豆ですって。先生、それはいったいどういうことですか。この地方の大豆は、藩と



放置された畑に生えた食物を食べる猪

農民の生活を支える大切なものです。」

「それはそうだが、大豆は江戸に売れるということ、藩では生産量を増やすために、強制的に村々に割り当てているということだ。」

仙庵は思い出したように言いました。

「そういえば農民たちが、『大豆で疲れた』と言っているのを聞いたことがあります。」

「大豆は焼き畑で作る。畑は数年で地力が衰えるので、次々と新しい焼き畑を作る。放置された畑には、根に栄養を貯えるワラビやクズ、ヤマイモなどがはえ、スキも生い茂る。これらは猪の大好物。食い物が増え、次々と子を産む。こうして増えた猪たちが次にねらったのが、人間が作った作物だ。」

「ということは、人間がむやみに大豆のための焼き畑を作ったから、ということになります。」

「そう、人間が自然のしくみを無理にこわしてしまったからだと思う。」

昌益は、飢饉はやませや猪だけでなく、生態系を破壊していく当時の政治や経済のしくみに主な原因があるという考えに達しました。

こうして書かれたのが、『自然真営道』や『統道真伝』という本です。

「天下のでたらめな誤りによって、病気に苦しみ思いもかけない災難にあつて天寿を全うできずに死んでいった人々のために、私は、精魂を傾けて理想社会の在り方を明らかにしたい。」（『自然真営道』より）

こうして昌益は、病人を診る医者から、猪飢渴の原因となった自然と社会のしくみの問題を鋭くえぐり出す医者へ変身していきました。

「第二章 読み物資料の活用例」

高い塔を建てなければ、新たな水平線は見えてこない

〜川口淳一郎〜 (1―(2) 2―3年)

一 ねらい

川口教授の業績を通して、より高い目標を目指し、自信、希望、勇気をもって着実にやり抜く強い意志をもとうとする道徳的実践意欲を育てる。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

前半は、「はやぶさ」計画が立ち上がったきっかけの場面を描いている。人類初のプロジェクトという未知なる、壮大な計画が、川口教授の「負けん気の強さ」という誰しも心のどこかにはもっている気持ちからスタートしていることに気付かせたい。

後半は、川口教授も最大のピンチの一つだったと語っている「はやぶさ」が行方不明になった場面である。科学的、工学的な努力はもちろんのこと、会議を増やす、ポットのお湯を替えるといったことで諦めない気持ちを維持させたことの意義を考えさせたい。

(2) 資料の概要

小惑星探査機「はやぶさ」は、月以外の天体の表面物質（土）を地球に持ち帰るといふ、人類史上初の快挙を成し遂げた。そのプロジェクトを指揮した川口教授は、日本オリジナルのアイデアであった「片道の小惑星ランデブー」をNASAに横取りされたことから奮起し、「はやぶさ」計画の実行を宣言する。

幾多の困難に見舞われながらも順調に飛行を続けていた「はやぶさ」だったが、地球への帰還の途中、一切の通信を絶ってしまふ。「復旧が不可能ではない」というほんのわずかな望みを捨てずに、できる限りの試みを行い、「はやぶさ」はすべてのミッションをやり遂げて地球へ帰還した。

三 展開例

○ NASAが日本と共同研究していた二つの計画をどちらもNA

SA 独自で行うと言ったとき、川口教授はどのように感じただろうか。

- ・五年以上もいっしょに考えてきたことなのに日本を外すなんて。バカにしている。しかも日本独自の案を横取りするのはひどい。
- 「はやぶさ」が行方不明になったとき、川口教授はどんなことを考えていただろう。

・「イトカワ」の土も回収できていないのか。悔しい。あんなにみんなまで喜び合ったばかりなのに。

- ・ここまで苦労したのもこれで終わりなのか。

○ プロジェクトの指揮官である川口教授が、なぜポットのお湯を自ら替えていたのだろう。

・終わりではないことを、周りの人に伝えたかったから。

・「はやぶさ」は帰ってくる自分自身に言い聞かせたかったから。

◎ 最後の川口教授からのメッセージを読んでどう思ったか。

・挑戦することが大事だということが伝わってきた。

・自分のやることにもっと自信をもちたい。

■ 文部科学省HP『心のノート』の「ステップアップのために」(二十二、二十三頁)を活用して高い目標をもつことについて考えさせる。

四 指導上の留意点及び工夫

・資料への関心を高めるため、JAXAホームページ「アーカイブス」の画像や動画等を提示し、「はやぶさ」プロジェクトの壮大さをイメージさせることも有効である。

・資料中で「困難」と一括りにした、開発段階や大気圏突入時等、その他のエピソードについて紹介するのもよい。

【写真提供】 JAXA

【参考文献】

- ・『はやぶさ、そうまでして君は』川口淳一郎著(宝島社)
- ・『小惑星探査機はやぶさ』川口淳一郎著(中公新書)
- ・東奥日報社連載「不死鳥になった『はやぶさ』60億キロの旅」から

人々の心の再生を目指して 佐藤初女

(2-1)(2) 2-3年

一 ねらい

悩みや問題を抱えた人々を受け入れる佐藤初女さんの生き方を通して、人間は関わり合いの中で生きていくことを自覚し、思いやりの心をもって生きていくというとする道徳的心情を養う。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

速さや明確さが先行して求められる今の時代に、じんわりとした優しさが感じられる草の根的な活動が人々の共感を呼び、支持されていることに気付かせたい。それは初女さんの行動が単なるあわれみではなく、互いの存在を強さも弱さも丸ごと受け止めようとする無償の愛情だからである。その心に触れたとき、人々は自ずと感謝の念を抱き、多くの人々に支えられて今の自分があることを自覚するのである。併せて生命尊重や自然への畏敬などを深く考えるための資料としても活用できる。

(2) 資料の概要

佐藤初女さんは、悩みや問題を抱えた人々を受け入れ、痛みを分かち合う癒しの活動を続けている人物である。食の見直しにより心の問題も改善できると訴え、心尽くしの料理と自然な対話で、生きることによって疲れた人の心に喜びと勇気を与えている。

岩木山麓に建てられた『森のイスキア』を訪れた青年は、初女さんのおむすびに込められた心遣いに触れ、やがて自殺を思いとどまる。九十歳を超える今でも見返りを求めず、人々の心の再生を目指し、活動を続けている初女さんの人間に対する深い理解と共感を感じ取らせたい。

三 展開例

- おむすびがタオルに丁寧に包まれていることに気が付いた時、青年はどう思っただろう。
- ・ 情けない自分のためにこんなにも心を尽くしてくれている。
- ・ 自分はなんて馬鹿なことを考えているのだろう。死ぬことなど止めよう。

- ◎ 自分にも味方がいるのだ。現実にも立ち向かっていこう。初女さんのおむすびを食べたら不思議と元気がわいてきたのはなぜだろう。

・ おいしく食べてほしい、という思いが食べている人に伝わったから。

・ お母さんのおむすびのように愛情が感じられたから。

・ 丁寧につくっていて本当においしいから。

・ お米の一粒一粒にまで心を配っている優しさが伝わったから。

- 真夜中、自分は何も食べられないほど体がつらいのにどうしてご飯の用意を始めるのだろう。

・ 自分の料理で生きる力を取り戻してほしいから。

・ 今の自分にできる精一杯のことをしたいから。

- 文部科学省HP『心のノート』の『思いやり』って：なんだろう？（五十、五十一頁）を活用し、思いやりについて考えをまとめさせることができる。

四 指導上の留意点及び工夫

- ・ 『森のイスキア』の名前の由来についての補足が必要である。
- ・ 資料への興味を高めるため、佐藤初女さんの人となりや伝わるように略歴や活動の様子等を紹介することが考えられる。
- ・ 生徒にじっくりと考えさせるための時間を十分に確保する。

震災のあと（2―6） 1～2年）

一 ねらい

立ち直っていく主人公の姿を通して、多くの人の善意や支えにより、日々の生活や今の自分があることに気付き、感謝をもってそれにこたえようとする道徳的心情を育てる。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

本資料は震災を体験した生徒の作文をもとに、実際のエピソードを加筆して再構成したものである。家を失い絶望するゆき子を支えた人々の行為や友情、そして立ち直ったゆき子の「伝えたい気持ち」に焦点を当て、今あることの幸福や支え合う人々の人間愛について生徒に考えさせる。

(2) 資料の概要

自宅が津波にのまれ、家族は無事だったものの、ゆき子は多くの大切なものを失ってしまう。暗い気持ちで自宅のがれきを片付けるゆき子だったが、親友のミキの励ましや級友の懸命な手伝いに、次第に元気を取り戻していく。ゆき子は、今の生活がかげがえのないものであることに気付き、多くの人からもらったものを自分もたくさんの人に伝えなければならぬと感じるようになる。

三 展開例

○ 何もかもなくしてしまったゆき子はどんな気持ちだっただろう。

・ 悲しい気持ち。何もやる気がしない。

・ 明日からどうやって暮らしていこう。

○ 何もしたくないと思っていたゆき子が、必ず学校に行こうと思っただけなのだろうか。

・ ミキに会って、話をしたいから。

・ 何もかもなくしたと思っていたけれど、自分には友だちがいると気付いたから。

・ 普通の暮らしに戻りたかったから。

○ 他の友だちはどんな気持ちでゆき子のところに来たのだろうか。

・ ゆき子を心配する気持ち。

・ 困っているのであれば、手伝いたいという気持ち。

◎ ゆき子ができるだけ多くの人に伝えたいと思っているのは、どんなことだろうか。

・ 人はいつも一人ではないということ。

・ 困っている人を励ましたり手伝ったりするやさしさ。

・ 毎日の生活に感謝して大切にしていこうということ。

■ 文部科学省HP『心のノート』の「ありがたい心の贈り物に」（六十五頁）を読み、ゆき子が感謝を感じていることに気付かせる。

四 指導上の留意点及び工夫

・ 震災で被災したり、家族を失ったりしている生徒がいる場合、配慮が必要である。

・ ゆき子がかわいそうだということに終始してしまわず、ゆき子が前向きにこれからの生き方を考えている点に着目させたい。

・ さまざまな人が道徳的実践をしたことにも触れたい。

・ ロールレタリングや話し合い活動など、表現活動を工夫したい。

【写真提供】八戸市立市川中学校

奥津軽にかける夢 ～白川公視～（4―8） 1～2年）

一 ねらい

旧津島家新座敷を復活させた白川公視さんの生き方を通して、地域社会の一員としての自覚をもって、郷土を愛し、郷土の発展に貢献しようとする道徳的実践意欲を育てる。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

白川公視さんの新座敷を公開し、ガイドをする姿を通して「郷土愛」について考えさせる。

白川さんの思いに共感させ、郷土に対する誇りをもたせることによって、物質的に満たされていないと感じていた生徒も、精神的に豊かな心をもつ人がこの地域にいるということを知り、身近な人への尊敬と感謝の気持ちを抱きながら、自分自身が誇り高い郷土に発展させていこうとする意欲がわいてくるものと考ええる。

(2) 資料の概要

郷土で現在活躍している白川公視さんは、旧津島家新座敷を受け継ぎ、太宰治についてガイドをしている人物である。

生徒には、白川さんのガイドを聞いたお客さんの様子や白川さんの考え方を通して、郷土に愛着をもち、郷土に貢献したいという思いを高めていきたい。

三 展開例

- 白川さんが新座敷を一般公開しようとしたのはなぜだろう。
- ・ 太宰の世界をもっと広く感じてほしいから。

- ・ 新座敷を通して金木町をもっと知ってほしいから。
- ・ 金木町を訪れる人が喜んでもらえると思ったから。

- 白川さんのガイドがお客さんの顔を輝かせ、ときには涙させてしまうのはなぜだろう。

- ・ 太宰の息づかいが感じられるような話し方をしているから。
- ・ お客さんの要望に合わせてガイドをしているから。
- ・ お客さんを満足させようと努力していることが伝わっているから。

- ◎ 白川さんの郷土に寄せる思いとは、どんなものだろうか。

- ・ 自分の郷土にある財産を大切にしていきたい。
- ・ 郷土を訪れてくれる人を満足させよう。
- ・ 自分の活動が少しずつ広がって郷土に貢献していきたい。

- 文部科学省HP『心のノート』の「ここが私のふるさと」（百二十、百二十一頁）を活用し、ふるさとに対して、自分ができることは何かをまとめさせる。

四 指導上の留意点及び工夫

- ・ 手の届かないような偉人ではなく、身近な地域で活躍している人の活動や考え方に共感させ、郷土に対する誇りをもたせる。
- ・ 展開の後段において、地域で活躍する人をゲストティチャーとして活用することも考えられる。

一 ねらい

自分の人生をかけて実現すべき目的を見出し出した富岡さんの考え方を通して、理想の実現を目指して自己の人生を切り拓いていこうとする道徳的実践意欲を育てる。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

富岡さんが、伝えたかったことや引き継がれている意志を考えさせ、よりよく生きるために必要なことや生きることについて深く考えさせたい。また、スローガンに「下北から」が入っていることについて考えさせることによって、理想の実現に向けて積極的に力強く取り組むことの大切さや自己の生き方との関わりを考えられるようにしたい。

(2) 資料の概要

野球を通して子どもたちを力強く成長させようとした富岡さんが「下北から甲子園へ」をスローガンにしながら、様々な思いを伝えようと奮闘し、甲子園まであと一歩というところまでたどり着くが、志半ばにして亡くなってしまふ。しかし、その思いは、今も教え子たちが指導者となって引き継いでいる。

三 展開例

○ どんな思いで「人生の甲子園を目指そう」といったのだろう。

・ よりよい人生を送ってほしかったから。

・ 野球で学んだことを人生に生かしてほしかったから。

○ 「夏までには帰ってくる」という言葉にはどんな思いが込められていると思うか。

・ 絶対に病気を治してやるという決意。

・ コーチや生徒たちへの激励。
・ 安心させるための心配り。

◎ 「下北から甲子園へ」に込められている富岡さんの思いとは何だろう。

○ なぜ、スローガンに「下北から」を入れたのだろう。

・ 野球を通して生き方を学ばせること。

・ ハンデ等に負けない強い気持ちを育てること。

・ どこへ行っても恥ずかしくない人間に育ってほしい。

■ 文部科学省HP『心のノート』の「自分の人生は自分の手で切り拓こう」(三十、三十一頁)の「人生とは・・・」の部分を読み、まとめとして、自分自身の生き方について考えさせる資料として活用することが考えられる。

四 指導上の留意点及び工夫

・ 導入時に、今日は、下北の子どもたちのために「ある思い」をもって頑張った人の話であることを確認する。あとで、「ある思い」について聞くことも確認する。

・ 野球に興味・関心がない生徒もいることから、甲子園について導入等で説明する。

・ 甲子園に出場することは目標ではあるが、人生の目的ではないことを押さえる。

・ 「下北から」とは、地元の手起用を意図するのではなく、下北の環境の中から素晴らしい人間を育てようとする意味合いであることに注意する。

・ 目標をもたせるのではなく、生きる目的や理想をもつことの大切さに迫るようにしたい。

洋式牧場の先駆者 廣澤安任 (1—2) 2—3年)

三 展開例

一 ねらい

多くの困難に立ち向かい、実現させる廣澤安任の生き方を通して、困難な状況でも、自分の決めたことや目標を目指し、希望と勇気をもって着実にやり抜く強い意志をもとうとする道徳的実践意欲を培う。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

この時期の生徒は、やりたいことに意欲的に取り組む態度が育ってくる。しかし、やりたいことや目標があっても、困難に直面すると簡単にあきらめて挫折し、自分の目標を見失ってしまうことがある。

本資料を通して、引き返すことができない困難な状況にあっても前向きに行動する主人公安任の生き方に共感させながら、困難にぶつかってもくじけずに自分が決めたことに向かって突き進んでいく心情を育てたい。

(2) 資料の概要

本資料は、会津藩士であった廣澤安任が戊辰戦争に敗れ、移住した三沢市に民間洋式牧場を開くために、多くの困難に立ち向かい、実現させる様子をまとめたものである。

安任は、会津藩士たちとその家族の生活の基盤を作るために、洋式牧場の経営に乗り出した。困難にぶつかりながらも、イギリス人の技術者の指導のもと、洋式の技術を取り入れ、牧場を拡大していく。政府の要職への要請も断り、地域発展のために力を尽くした。その後、長男弁二に牧場を譲り、東京での牧場経営に乗り出したが、志半ばで六十一年の生涯を閉じた。

○ 開墾が進まない中で、牧場の経営を決意したとき、どんな気持ちだったのだろうか。

・ 藩士やその家族を守っていくために、必ず成功させなければならぬ。

・ 農業だけでは生活していけない。昔から馬の放牧が行われているから、成功できるはずだ。

◎ 大久保利通からの申し出を「野にあって国家に尽くす。」と断ったとき、どんな気持ちだったのだろうか。

・ この牧場で、会津の人たちや地域の人々のために力を尽くすことが、自分が国のためにできることだ。

・ 自分がやると決めた牧場だから、辛いことがあっても、みんなと力を合わせて、必ずやり遂げよう。

○ 漢詩を詠んだときはどんな気持ちだったのだろうか。

・ 困難が多い人生だったが、自分が決めた道を進んで満足だ。

・ 少しずつ牧場が軌道にのってきたから、これからはがんばっていこう。

■ 文部科学省HP『心のノート』の「ステップアップのために」(二十二、二十三頁)を活用することができる。

四 指導上の留意点及び工夫

・ 当時の時代背景や地域の自然環境をとらえられる補助資料を活用したい。

【写真提供】三沢市先人記念館

【参考資料】三沢市先人記念館

・ 小学校社会科副読本『やすらぎとうるおいのまち三沢市』(三沢市教育委員会発行)

一 ねらい

高い理想を求め、志をもって島司の任を務めた儀助の生き方を通して、真理を愛し、真実を求め、理想の実現を目指して自己の人生を切り拓いていこうとする道徳的心情を育てる。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

この時期の生徒は、人間としての生き方や社会のしくみについて関心が高まってくる。また、自分の将来に向かって理想を求める傾向も強くなってくる。しかし、実際はどのような自己実現を図っていくのか分からず、安易に妥協することが多い。

本資料を通して、主人公儀助の生き方に共感させながら、理想の実現を目指して、自己の人生を切り拓いていこうとする心情を育てたい。

(2) 資料の概要

本資料は、弘前市出身の笹森儀助が奄美大島の島司時代を中心に、理想の実現のために勇氣と情熱をもって働いた姿をまとめたものである。

儀助は、奄美大島の探検経験から、島の人々の生活を楽にしてやるためにあえて島司の仕事を選んだ。かつて岩木山麓の開拓を行った儀助は、この島を開拓した藤井富伝の生き方に共感し、島の豊かさを目指して努力した。しかし、古い因習や慣習、迷信という大きな壁にぶつかりながらも島の開拓と産業の発展に力を尽くした。その後、青森市の市長になり、大正四年

七十一歳で生涯を閉じた。

なお、本資料は、平成九年三月に青森県教育委員会が発行した道徳郷土資料に掲載されたものを改訂したものである。

三 展開例

- 主人公が砂糖を作る会社の社長になるか、奄美大島の島司になるか迷ったのはなぜだろう。
- ・ 楽な生活を送りたい気持ちがある一方、島の人々の恵まれな生活状態をよくしたいという思いがあったから。
- 主人公が奄美大島の島司になると決心したのは、どんな思いからだろう。
- ・ 必死になって生きる島の人々に深い同情を抱いていたから。
- ・ これからの人生を島の人々のために捧げようと思ったから。

- ◎ 主人公は島の人々の古い因習や慣習、迷信などとぶつかり、さまざまな困難にあつたにもかかわらず、なぜ教育や開拓に力を入れ続けたのだろう。
- ・ 島の人々の生活をよくしたいという理想があつたから。
- ・ 苦労なくして理想の実現はないと思ったから。
- ・ 自分の人生をかけていたから。

■ 文部科学省HP『心のノート』の「自分の人生は自分の手で切り拓こう」(二十〜三十三頁)を活用することができる。

四 指導上の留意点及び工夫

- ・ 資料への興味を高めるため、笹森儀助の人物史と奄美大島の地理や歴史、主な産業などについての資料を提示することが考えられる。

・ ねらいとする道徳的価値について、自分との関わりにおいて考える時間を十分確保する。

【写真提供】・ 笹森家

・ 東奥日報社

岩木川治水を手がけて ～長尾角左右衛門～

(1) | (2) 1 | 2年)

一 ねらい

幾多の困難を乗り越え、強い意志とたゆまぬ努力をもって目標を達成した角左右衛門の生き方を通して、自分でやろうと決めたことは、粘り強く最後までやり遂げようとする道徳的心情を育てる。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

この時期の生徒は、目標に向かって実践する中で、様々な誘惑に負けたり、当初の意気込みを忘れ、以前と同じ習慣に流されてしまったり、一度決心したことを長く続けることができない傾向にある。

本資料を通して、幾多の困難をも乗り越え、見事に目標を達成した主人公の生き方に共感させ、自分でやろうと決めたことを最後まで粘り強くやり遂げることのすばらしさを感じとらせたい。

(2) 資料の概要

北津軽郡三好村大字鶴ヶ岡（現五所川原市）出身の長尾角左右衛門が、幾多の困難に負けずに、岩木川の治水事業をやり遂げるまでをまとめたものである。

護岸整備や用水路が完備している現在、生徒たちは洪水の経験がほとんどないが、東日本震災関連の様々な報道を通して、堤防の決壊や建物の破壊等は強く印象に残っているものと思われる。

三 展開例

なお、本資料は、平成九年三月に青森県教育委員会が発行した道徳郷土資料に掲載されたものを改訂したものである。

○ 主人公はどんな気持ちで「岩木川改修期成同盟」を作ったのだろうか。

・ 岩木川を治水して、洪水で苦しんでいる人を助けたい。

・ 洪水をなくし、住みよい村にしたい。

・ 小さい頃の体験が忘れられず、村の役に立ちたい。

○ 主人公は、どんな気持ちで調査活動が続けたのだろうか。

・ 岩木川の性質を知るためには、危険を冒しても実際に調査しなければならぬ。

・ 何があってもあきらめない。

・ 絶対に成功させる。

◎ 岩木川の治水にかけた約五十年間、主人公を支えたものは何だろう。

・ 地域の人々の豊かな生活のために働こうと強く決心したこと。

・ 小さい頃からの思いや故郷を守りたいという強い意志。

・ 家族や周囲の人々の協力と流域の人たちの願い。

■ 文部科学省HP『心のノート』の「ステップアップのために」（二十二～二十五頁）を活用し、強い意志について考えさせることができる。

四 指導上の留意点及び工夫

・ 資料への興味を高めるために、画像や映像を使って洪水の様子を提示するとともに、岩木川や目屋ダムについての資料を提示することが考えられる。

・ 中心発問として、「岩木川治水に関わった約五十年」としたが、「目屋ダム完成までの二十八年」としてもよい。

袈裟掛けの松　　法身禅師（2―5）　　2～3年

一　ねらい

修行を積み重ね、自らを向上させようとする法身禅師の生き方を通して、人にはいろいろなもの見方や考え方があつたことを理解し、寛容の心もち、謙虚に他に学ぼうとする道徳的心情を育てる。

二　資料の特質

(1) 資料の生かし方

本資料は、十和田市の洞内にある法蓮寺という寺を開山した法身禅師の逸話である。

中学生の時期は、もの見方や考え方に違いが現れ、個性が芽生えてくる。しかし、自分の考えに固執し他と摩擦が生じたり、逆に周囲から浮くことを恐れ過剰に同調してしまう場合もある。人によつて様々なもの見方や考え方があつたことを十分に理解させ、寛容の心もち謙虚に学び続けた主人公の広い心に共感させる。また、他の人とは違う自分らしさを求め、自らを向上させようとした生き方に焦点を当てて考えさせる。

(2) 資料の概要

法身禅師は、真壁藩で草履取りとして仕えていた時、「雪見の会」で殿様の草履を懐に入れて暖めていたところ、尻に敷いていたと誤解されてしまう。自分の思いやりを理解されなかつた悔しさを胸に出家し、修行を積み重ねた法身は、高僧となつて殿様と再会した。その時、法身は殿様を恨むことなく、自らの恩人だと言いつつて手を取り合つた。

なお、本資料は、平成九年三月に青森県教育委員会が発行した道徳郷土資料に掲載されたものを改訂したものである。

三　展開例

- 平四郎は、どんな気持ちで草履を懐に入れ、長年仕えた館を去つたのだろうか。
- ・ どうしてこんなひどいことをされるのかという悔しい気持ち。

- 自分の思いやりが通じなかつた悲しい気持ち。
- 法身は、どんなことを考えながら厳しい修行に取り組んだのだろうか。

- ・ 殿様のことを恨み続けた。
- ・ 殿様のことを忘れ、自分らしさを見つけ出そうとした。
- ・ 自分自身を精神的に成長させようとした。

- ◎ 法身は、どんな気持ちから殿様に対して「あなたは私の恩人です」と言えたのだろうか。

- ・ 修行を続け、人を許すことの大切さに気付いたことから。
- ・ 自分自身を成長させてくれたきっかけをくれたことから。
- ・ 誰にでも過ちはあるのだということを悟つたことから。

■ 文部科学省HP『心のノート』の「いろいろな立場があり考えがある」（六十～六十三頁）を活用し、それぞれの立場や考えを尊重することの大切さを考えさせる。

四　指導上の留意点及び工夫

- ・ 自分の立場を客観的にみることができるようになるとともに、他の人々のそれぞれの個性や立場を尊重するよう工夫する。
- ・ 個性とは固定されたものではなく、自分自身の努力によつて絶えず磨き続けていくものであることを理解させる。

【写真提供】富田敦氏（三沢市立上久保小学校長）

【参考資料】『郷土の発展につくした人々』

（十和田市教育研修センター　昭和四十二年発行）

孤児院のオドサ 佐々木五三郎(2) (2) (3年)

一 ねらい

生涯にわたり孤児救済に尽くした佐々木五三郎の生き方を通して、温かい人間愛の精神を深め、他の人々に対して思いやりの心をもとうとする道徳的心情を育てる。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

本資料は、主人公が自らの信念を貫き通し、孤児救済に生涯を捧げた実話に基づいている。

中学生の時期は、人間愛に基づく他の人との関わりの大切さを理解しているものの、自己中心的な考え方をしたり、利己的な言動をしたりする場合がある。弱者を救おうと努力続けた主人公の生き方に共感し、周囲の誤解を恐れず行動で示した主人公の人間愛の精神に焦点を当てて考えさせる。

(2) 資料の概要

佐々木五三郎は、青森県で最初の孤児院「東北育児院」(現在の弘前愛成園)を創設した人物である。早くから両親を失った五三郎は、苦難の道を歩み続け、ようやく自立する。そのころ県内は大凶作に見舞われ、路頭に迷う孤児たちを引き取り、私財を投げ打って育児院を創設したのが五三郎である。育児院を始めてからの五三郎の苦労は並大抵ではなかったが、孤児救済のために生涯その信念を貫き通す。

なお、本資料は、平成九年三月に青森県教育委員会が発行した道徳郷土資料に掲載されたものを改訂したものである。

三 展開例

○ 五三郎は、大凶作の時、どんな気持ちで子どもたちを自宅に引き取ったのだろう。

・ 食べ物が無い子どもたち、困っている子どもたちを見てられない。

・ 自分も親と幼い頃に死に別れているので放っておけない。

○ 五三郎は、街角や慈善館で「諸君よ、諸君よ。」と演説しているが、どんな気持ちで演説したのだろう。

・ このまま子どもたちを見捨ててよいのだろう。

・ 私たち大人は、困っている子どもたちを助けていかなければならない。

◎ 「身よりのない子どもたちを働かせて利益を得ている。」と誤解されながらも、信念を貫き通した五三郎はどんな人だったのだろう。

・ 困っている人のために行動する思いやりをもった人。

・ 人に尽くすことを生きがいにしている人。

・ 弱い立場の人を救おうとする優しさあふれる人。

■ 文部科学省HP『心のノート』の「『思いやり』って…なんだろう？」(五十、五十一頁)を活用し、思いやりについて考えをまとめさせる。

四 指導上の留意点及び工夫

・ 明治時代の生活ぶりや飢饉の厳しさなどについては教師が説明し、当時の子どもたちが苦労していた様子を理解させる。

・ 思いやりの大切さに気付かせるばかりではなく、自分も他の人も、ともにかけがえのない人間であることを自覚させ、助け合いや支え合いの必要性を実感させるよう工夫する。

【写真提供】 社会福祉法人弘前愛成園

【参考資料】 『社会福祉法人弘前愛成園史』(昭和四十二年発行)

日本で最初に予防接種をした男 中川五郎治

(3—1) 2—3年

一 ねらい

天然痘の予防接種を行う五郎治の献身的な活動を通して、生命の尊さを知り、かけがえのない自他の生命を尊重しようとする道徳的心情を育てる。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

昔から、生命を守るために人々は様々な努力を繰り返して現在に至っている。予防接種も様々な努力の一つである。

しかし、現在は「いじめ」や「自殺」といった事案がしばしば起こっている。このような状況で、日々生活している生徒だからこそ、今まで親が大事に育ててきたことに気付かせながら、生命の尊さを自覚させ、大切にしていこうとする心情を育てていきたい。

(2) 資料の概要

中川五郎治は、若い頃に松前に渡り、ロシアの軍艦に捕らえられ、シベリアに連行された。その間に天然痘を予防する方法を身に付け、帰国後、松前で日本で最初に種痘（予防接種）を行った。周囲の偏見の中で、死ぬまで天然痘の予防接種を行い続けた。

なお、本資料は、平成九年三月に青森県教育委員会が発行した道徳郷土資料に掲載されたものを改訂したものである。

三 展開例

○ 五郎治は種痘を成功させるためにどんな苦勞をしたのだろう。

・天然痘にかかった牛を見つけたために農家を回った。

◎ 人々の偏見に耐えて、予防接種を続けた。

・医者でもない五郎治は、どうして様々な苦勞をしてまで、人に種痘をしようとしたのだろう。

・命は大切なものなので、できるだけ多くの人々の命を救いたい。

い。

・ハナのように死んでしまう人をなくしたい。

・子どもを一人残して家族が山中に逃げるようなことはなくな

ってほしいと思ったから。

○ みんなが生まれたとき、御両親はどんな気持ちだっただろう。

・元気に育ってほしい。

○ 何人かの保護者からの手紙を読んでみる。

■ 文部科学省HP『心のノート』の「かけがえのない生命」（七十二—七十五頁）を活用したい。

四 指導上の留意点及び工夫

・導入では、予防接種のしくみについて、できれば図や映像資料を活用しながら理解させたい。

・終末では、生命の尊さを伝える詩を朗読するなどの工夫も考えられる。

【写真提供】函館市中央図書館

いのししけがじ
猪飢渴を見つめた人 安藤昌益 (2―2) 2―3年)

一 ねらい

猪飢渴について深く考えていく昌益の姿を通して、温かい人間愛の精神を深め、他の人々に対し思いやりの心をもとうとする道徳的心情を養う。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

本資料を通して、人間はみな平等であるという人間愛に満ちた生き方に触れることにより、人間尊重の精神に基づく人間に対する深い理解と共感を呼び起こし、自己の生き方をより高いものにさせたい。

(2) 資料の概要

江戸時代中期、安藤昌益が八戸に移り住んでまもなく、これまで体験したことのない飢饉に見舞われ、多くの農民が、餓死するのを目の当たりにした。世にいう「猪飢渴(いのししけがじ)」である。昌益は、その原因を深く考え、当時の政治や経済のしくみに問題があると主張した。そして、その犠牲になるのは農民であり、現実の矛盾を強く感じた。その思想を『自然真営道』に著した。

なお、本資料は、平成九年三月に青森県教育委員会が発行した道徳郷土資料に掲載されたものを改訂したものである。

三 展開例

○ 「食べ物を作っている農民がバタバタ死んでいく。これはなぜなんだ。」と言ったときの昌益はどんな気持ちだったのだ

ろう。

- ・ 無力感から、絶望的な気持ち。
- ・ 農民が次々と死んでいくのはつらい。
- ・ あまりの悲惨な状況に憤慨している。

◎ 「天下の政治のでたらめな誤りによって、病気に苦しみ、思いもかけない災難にあつて、天寿を全うできずに死んでいった人々のために私は精魂を傾けて理想社会の在り方を明らかにしたい。」と言う昌益を、どんな人だと思ふか。

- ・ 医者なのに政治に口を出すのはやり過ぎだ。
- ・ 農民のことが心配でたまらない人だ。
- ・ 弱い人々の味方で、心の優しい人だ。

○ 農民のことを真剣に考え続けた昌益に、手紙を書いてみよう。
■ 文部科学省HP『心のノート』の『思いやり』って…なんだろう？(四十八〜五十一頁)を活用したい。

四 指導上の留意点及び工夫

- ・ 当時の時代背景や「猪飢渴」を補助資料を活用しながら説明していきたい。

【資料提供】八戸市総合教育センター

小学校第5学年及び第6学年	中学校
1 主として自分自身に関すること	
(1) 生活習慣の大切さを知り、自分の生活を見直し、節度を守り節制に心掛ける。	(1) 望ましい生活習慣を身に付け、心身の健康の増進を図り、節度を守り節制に心掛け調和のある生活をする。
(2) より高い目標を立て、希望と勇気をもってくじけないで努力する。	(2) より高い目標を目指し、希望と勇気をもって着実にやり抜く強い意志をもつ。
(3) 自由を大切にし、自律的で責任のある行動をする。	(3) 自律の精神を重んじ、自主的に考え、誠実に実行してその結果に責任をもつ。
(4) 誠実に、明るい心で楽しく生活する。	
(5) 真理を大切にし、進んで新しいものを求め、工夫して生活をよりよくする。	(4) 真理を愛し、真実を求め、理想の実現を目指して自己の人生を切り拓いていく。
(6) 自分の特徴を知って、悪い所を改めよい所を積極的に伸ばす。	(5) 自己を見つめ、自己の向上を図るとともに、個性を伸ばして充実した生き方を追求する。
2 主として他の人とのかかわりに関すること	
(1) 時と場をわきまえて、礼儀正しく真心をもって接する。	(1) 礼儀の意義を理解し、時と場に応じた適切な言動をとる。
(2) だれに対しても思いやりの心を持ち、相手の立場に立って親切にする。	(2) 温かい人間愛の精神を深め、他の人々に対し思いやりの心をもつ。
(3) 互いに信頼し、学び合って友情を深め、男女仲よく協力し助け合う。	(3) 友情の尊さを理解して心から信頼できる友達をもち、互いに励まし合い、高め合う。
	(4) 男女は、互いに異性についての正しい理解を深め、相手の人格を尊重する。
(4) 謙虚な心を持ち、広い心で自分と異なる意見や立場を大切ににする。	(5) それぞれの個性や立場を尊重し、いろいろなもの見方や考え方があることを理解して、寛容の心を持ち謙虚に他に学ぶ。
(5) 日々の生活が人々の支え合いや助け合いで成り立っていることに感謝し、それにこたえる。	(6) 多くの人々の善意や支えにより、日々の生活や現在の自分があることに感謝し、それにこたえる。
3 主として自然や崇高なものとの関わりに関すること	
(1) 生命がかけがえのないものであることを知り、自他の生命を尊重する。	(1) 生命の尊さを理解し、かけがえのない自他の生命を尊重する。
(2) 自然の偉大さを知り、自然環境を大切ににする。	(2) 自然を愛護し、美しいものに感動する豊かな心を持ち、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深める。
(3) 美しいものに感動する心や人間の力を超えたものに対する畏敬の念をもつ。	
	(3) 人間には弱さや醜さを克服する強さや気高さがあることを信じて、人間として生きることに喜びを見いだすように努める。
4 主として集団や社会とのかかわりに関すること	
(1) 公德心をもって法やきまりを守り、自他の権利を大切にしながら進んで義務を果たす。	(1) 法やきまりの意義を理解し、遵守するとともに、自他の権利を重んじ義務を確実に果たして、社会の秩序と規律を高めるように努める。
	(2) 公德心及び社会連帯の自覚を高め、よりよい社会の実現に努める。
(2) だれに対しても差別をすることや偏見をもつことなく公正、公平にし、正義の実現に努める。	(3) 正義を重んじ、だれに対しても公正、公平にし、差別や偏見のない社会の実現に努める。
(3) 身近な集団に進んで参加し、自分の役割を自覚し、協力して主体的に責任を果たす。	(4) 自己が属する様々な集団の意義についての理解を深め、役割と責任を自覚し集団生活の向上に努める。
(4) 働くことの意義を理解し、社会に奉仕する喜びを知って公共のために役に立つことをする。	(5) 勤労の尊さや意義を理解し、奉仕の精神をもって、公共の福祉と社会の発展に努める。
(5) 父母、祖父母を敬愛し、家族の幸せを求めて、進んで役に立つことをする。	(6) 父母、祖父母に敬愛の念を深め、家族の一員としての自覚をもって充実した家庭生活を築く。
(6) 先生や学校の人々への敬愛を深め、みんなで協力し合いよりよい校風をつくる。	(7) 学級や学校の一員としての自覚をもち、教師や学校の人々に敬愛の念を深め、協力してよりよい校風を樹立する。
(7) 郷土や我が国の伝統と文化を大切にし、先人の努力を知り、郷土や国を愛する心をもつ。	(8) 地域社会の一員としての自覚をもって郷土を愛し、社会に尽くした先人や高齢者に尊敬と感謝の念を深め、郷土の発展に努める。
	(9) 日本人としての自覚をもって国を愛し、国家の発展に努めるとともに、優れた伝統の継承と新しい文化の創造に貢献する。
(8) 外国の人々や文化を大切にする心を持ち、日本人としての自覚をもって世界の人々と親善に努める。	(10) 世界の中の日本人としての自覚をもち、国際的視野に立って、世界の平和と人類の幸福に貢献する。

○「道徳の内容」の学年段階・学校段階の一覧表

小学校第1学年及び第2学年	小学校第3学年及び第4学年
1 主として自分自身に関すること	
(1) 健康や安全に気を付け、物や金銭を大切に、身の回りを整え、わがままをしないで、規則正しい生活をする。	(1) 自分でできることは自分でやり、よく考えて行動し、節度のある生活をする。
(2) 自分がやらなければならない勉強や仕事は、しっかりと行う。	(2) 自分でやろうと決めたことは、粘り強くやり遂げる。
(3) よいことと悪いことの区別をし、よいと思うことを進んで行う。	(3) 正しいと判断したことは、勇気をもって行う。
(4) うそをついたりごまかしをしたりしないで、素直に伸び伸びと生活する。	(4) 過ちは素直に改め、正直に明るい心で元気よく生活する。
	(5) 自分の特徴に気付き、よい所を伸ばす。
2 主として他の人とのかかわりに関すること	
(1) 気持ちのよいあいさつ、言葉遣い、動作などに心掛けて、明るく接する。	(1) 礼儀の大切さを知り、だれに対しても真心をもって接する。
(2) 幼い人や高齢者など身近にいる人に温かい心で接し、親切にする。	(2) 相手のことを思いやり、進んで親切にする。
(3) 友達と仲よくし、助け合う。	(3) 友達と互いに理解し、信頼し、助け合う。
(4) 日ごろ世話になっている人々に感謝する。	(4) 生活を支えている人々や高齢者に、尊敬と感謝の気持ちをもって接する。
3 主として自然や崇高なもののかかわりに関すること	
(1) 生きることを喜び、生命を大切にする心をもつ。	(1) 生命の尊さを感じ取り、生命あるものを大切にする。
(2) 身近な自然に親しみ、動植物に優しい心で接する。	(2) 自然のすばらしさや不思議さに感動し、自然や動植物を大切にする。
(3) 美しいものに触れ、すがすがしい心をもつ。	(3) 美しいものや気高いものに感動する心をもつ。
4 主として集団や社会とかかわりに関すること	
(1) 約束やきまりを守り、みんなが使う物を大切にする。	(1) 約束や社会のきまりを守り、公德心をもつ。
(2) 働くことのよさを感じて、みんなのために働く。	(2) 働くことの大切さを知り、進んでみんなのために働く。
(3) 父母、祖父母を敬愛し、進んで家の手伝いなどをして、家族の役に立つ喜びを知る。	(3) 父母、祖父母を敬愛し、家族みんなで協力し合って楽しい家庭をつくる。
(4) 先生を敬愛し、学校の人々に親しんで、学級や学校の生活を楽しくする。	(4) 先生や学校の人々を敬愛し、みんなで協力し合って楽しい学級をつくる。
(5) 郷土の文化や生活に親しみ、愛着をもつ。	(5) 郷土の伝統と文化を大切に、郷土を愛する心をもつ。
	(6) 我が国の伝統と文化に親しみ、国を愛する心をもつとともに、外国の人々や文化に関心をもつ。

平成24年度 道徳教育指導資料「郷土資料にかかわる実践事例集」【中学校編】

作 成 委 員

青森市立佃中学校	校 長	久 慈 和 寛
青森市立沖館中学校	教 諭	福 井 薫
五所川原市立金木中学校	教 諭	番 場 武 明
黒石市立中郷中学校	教 諭	藤 本 恵 美
六ヶ所村立第一中学校	教 諭	井 関 結 香
大間町立大間中学校	教 諭	佐々木 崇
八戸市立市川中学校	教 諭	下 村 ゆ う
東青教育事務所	指 導 主 事	斉 藤 直 樹
西北教育事務所	指 導 主 事	坂 本 朋 子
中南教育事務所	指 導 主 事	長 尾 朗
上北教育事務所	指 導 主 事	繁在家 康 文
下北教育事務所	指 導 主 事	山 本 敦
三八教育事務所	指 導 主 事	蔦 川 誠

なお、次の者が編集に当たりました。

青森県教育庁学校教育課	課 長	成 田 昌 造
青森県教育庁学校教育課	学校教育企画監	伊 藤 直 樹
青森県教育庁学校教育課	総括副参事	中 谷 保 美
青森県教育庁学校教育課	主任指導主事	中 村 隆 人
青森県教育庁学校教育課	指 導 主 事	木 村 文 宣

